



TITLE:

# 『水滸傳』批判について (創立五十周年記念論集)

AUTHOR(S):

竹内, 實

---

CITATION:

竹内, 實. 『水滸傳』批判について (創立五十周年記念論集). 東方學報  
1980, 52: 715-764

ISSUE DATE:

1980-03-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/66571>

RIGHT:

# 『水滸傳』批判について

竹 内 實

- 一 批判の概略
- 二 批判の論點
- 三 批判と現實過程
- 四 毛澤東と『水滸傳』

## 一 批判の概略

古典小説『水滸傳』にたいする批判、とりわけその主人公・宋江に的をしぼっての批判は、一九七五年八月にはじまり、當時やや下火になりつつあった「批林批孔」運動のあとをうける社會的な批判運動として、約一年あまり推進されたあと、毛澤東の死によつて終熄したものである。<sup>(1)</sup>

すでに知られているように、これはただ文藝作品や作中人物を批判することだけを目的とするものではなく、政治的な意圖のもとに發動された運動であつた。はじめ、宋江を「投降派」と規定し、『水滸傳』はこれを宣揚した、否定的に讀むべき惡しき作品、すなわち「反面教材」であるとして批判運動が展開されたが、七六年四月、「天安門事件」が發生して鄧小平の公職が剝奪されると、鄧小平こそは「現代投降派」であると指摘されて、『水滸傳』・宋江批判と鄧小平批判が公然とむすびつけられるにいたつた。「批林批孔」運動が、歴史上の人物である孔子と、當面の否定的對象である林彪をむすびつけたのと同工

異曲であって、いうならば、これは「批鄧批宋」運動だったともいえよう（ただし、「批鄧批宋」という用語は使われなかった）。

この運動は毛澤東の死去によって終熄した。しかしたとえば、毛澤東の死につぐ「四人組」逮捕のあと、京劇復活の風潮のなかにあって、その伝統的な演目を上演するのに、宋江を登場させるのを避けて、わざわざ主人公を宋江から晁蓋にとりかえる、といった事態が一九七八年に発生している。<sup>(2)</sup> ひさびさに、なじみぶかい「三たび祝家莊を打つ」を舞臺に眺めた観客は、おそらく仰天したにちがいない。宿敵のたてこもる祝家莊を攻めること二度、二度とも失敗したものの工夫をこらして、三度目について勝利する、このいくらか陰險でもある智慧者は、やはり宋江でなければならぬのではないか。これは『水滸傳』のなかでも精彩ある一段であり唯物辯證法を活用した事例として、毛澤東「矛盾論」にもあげられているものである。

かくも強烈な影響を残した批判運動を推進したのは、〈文革派〉の頂點にたつ、いわゆる「四人組」、張春橋、江青、姚文元、王洪文ら、とりわけ、姚文元、そして江青・毛澤東夫人であり、運動の性質は毛澤東の死の近づいたことを豫感したかれらがとりくんだ権力闘争であった。毛澤東に即していえば（これが毛澤東の發意であったか否かはべつとして）、かれが好んで發動し展開した文藝批判運動の最後の運動であった。

新中國の成立後、毛澤東は、文藝批判をまえばれとしての社會的な批判運動を何回となくくりかえしている。映畫『武訓傳』批判にはじまる、『紅樓夢』研究批判、胡風の文藝思想批判、さらには文革のさいの歴史劇『海瑞、官をやめる』批判、雜文集『燕山夜話』批判、雜文「三家村札記」批判、「國防文學」のスローガン批判、三十年代文藝批判、等々、それらは、けっして文藝上の批評におわることはなかったのである。<sup>(3)</sup>

しかしまた、それらは、政治的批判だった、社會運動だった、と單純に要約できるといふものでもなかった。そこには、まづ文學作品、藝術作品があった。文藝上の概念や論争があり、文藝界のできごととしての様相があった。作品をどのように讀むかが問われていた。だが、それはまた、作品をどのようにに讀者をとりまく現實に對應させて讀むか、という問いでもあった

のである。そして、この二つの問いは、一つにかさねあわせられてもいた。

この『水滸傳』、宋江批判も、こうした問いのもとに展開している。

『水滸傳』、宋江批判の最初の論文は、「解放軍某部 劉禎祥 聶敬華」署名の「『水滸』は投降主義を宣揚する反面教材である」である（以下、解放軍論文と略稱する）。これは、『光明日報』一九七五年八月二十三日、「文學」欄第一期にかかげられた。<sup>(4)</sup>

一ページ特集の「文學」欄は、隔週掲載のたてまえで新設されたものであるにもかかわらず、はやくもつぎの週には「（増刊）」として第二期が掲載され、梁效「魯迅の『水滸』評はすばらしい」をはじめとする論文・短評が紙面を占めた。これからあとは、批判論文が「文學」欄からあふれるようにして一般記事の紙面にあらわれ、さらに新設された「史學」欄もこの批判論文によってうめられた。『人民日報』も同様の論文でうまった。

だが、このときの『水滸傳』を批判するうごきそのものは、実際上は、この解放軍所屬の兵士（もしくは文化工作者）の連名による論文が、批判の口火をきったわけではない。

批判論文第一號の筆者は、趙安亭という、山東省の農村に定着した知識青年であった。<sup>(5)</sup>

趙安亭は一九七三年末に、「叛徒の頌歌」という論文を書き、天津にある南開大學の中國文學科古典文學教研室にあって、この論文を送った。この教研室は、「『水滸』の思想と藝術」（以下、南開大學論文と略稱する）<sup>(6)</sup>という論文を發表しており、かれの論文はこれを批判するものであった。

南開大學の同教研室は、一九七四年春、趙安亭をまねいて報告をきき、前出の論文にたいする自己批判ともいうべき論文を、同大學の學報に發表した。そのさいのペンネームは「鍾谷」であった。それをさらに加筆、改題した論文が、『紅旗』七五年九期に掲載された、鍾谷「『水滸』の投降主義路線を評す」である。

この號の『紅旗』は『水滸傳』批判の小特集ともいふべき編集をおこなっていて、恒例である巻頭の「毛主席語録」四ページのあと、魯迅が『水滸傳』を批評したことをかかげ、そのあとに短評一篇と趙安亭の論文を含む論文四篇をならべている。<sup>(7)</sup> 鍾谷の論文には「作者附記」があつて、この訂正論文が書かれるにいたつた経緯をあきらかにしている。

『紅旗』特集の冒頭を飾つた魯迅の文章は、つぎのとおりである。

『水滸傳』は、明快に物語っている。天子には反對しないのだから、それで大軍がやってくると招安をうけいれ、國家に替<sup>かわ</sup>つてべつの強盜——「天に替つて道を行う」ことをしない強盜を、討伐しにいった。つまるところは、奴隸であつた。

「ゴロツキの變遷」『魯迅全集』四卷一二三ページ

この魯迅のことばは、批判を推進する側によつて『水滸傳』批判の金科玉條として、しばしば引用され、つぎにのべる毛澤東のことばとともに、批判の基調となつた。(ただし、この引用は、批判側にとつて都合のわるい箇所を回避している。また、魯迅が『水滸傳』についてのべたのは、これが唯一ではない。<sup>(8)</sup>)

要するに、一九七五年八月末の新聞とそのころ發行された雑誌『紅旗』によつて、この批判運動の幕があがつたのである。

ついで、九月四日、「偉大な領袖毛主席の指示にのつとつて、本紙およびそのほかの新聞雑誌は、『水滸』にたいする評論と討論を開始した」にはじまる。人民日報社説「『水滸』にたいする評論を展開せよ」<sup>(9)</sup>は、『水滸傳』についての毛澤東の論評を引用し、この運動が毛澤東の「指示」によつておこなわれるものであることをあきらかにした。毛澤東の論評は引用がくぎられていて、二度にわたつて發言されたものようである。

『水滸』という書物は絶妙であるが、どこが絶妙かといえは投降するところだ。反面教材にして、人民にもれなく投降派だと知らせるがいい。

『水滸』は、ただ惡徳官吏に反<sup>さむ</sup>くだけで、皇帝には反<sup>さむ</sup>かない。晁蓋を百八人の外に屏<sup>しりぞ</sup>けた。宋江は投降しおつて修正主義をやり、晁の聚義廳を忠義堂と改名し、人さまに招安されてしまった。宋江と高俅の闘争は、地主階級内部のこちらの

派があちらの派に反対するといった闘争だ。宋江は投降すると、さっそく方臘討伐にでかけていった。』

この毛澤東のことばが公表されたことによって、『水滸傳』は批判されるべきである、宋江は批判されるべきである、という命題は疑問の餘地がないものとなった。少なくとも、疑問の餘地がないものとして、この命題がまかりとおるようになった。かりに疑問があったとしても、正統性はこの命題をふりかざす側にあって、疑問を提出する側にはなく、たとえ提出したとしても、まともにとりあげられる雰囲気ではなかった。

毛澤東のことばの公表は、批判論文にあたらしい論點をつけくわえなかった。これが公表されるまえに發表されていた解放軍論文、『紅旗』九期の短評や同誌掲載の諸論文には、毛澤東のことばが提起した論點があらかじめ含まれていたのである。

『紅旗』九期の、二十七ページを占める『水滸傳』批判小特集ともいべき部分の第一ページは、まえにのべたように魯迅の『水滸傳』評をかかげていたが、その上部には、「反面教材にして、人民にもれなく投降派だと知らせるがいい」という毛澤東のことばを、『水滸傳』を」と補足したうえで（毛澤東のことばとは断らずに）掲載しており、さらに目次の小特集の標示にも使っている。——「用『水滸』做反面教材 使人民都知道投降派」。

『紅旗』の編集部はもとより、批判論文の執筆者たちが、九月四日の人民日報社説を讀んで、はじめて毛澤東のこのようなことばを知ったというのでなかったことは、あきらかである。毛澤東のことばをいち早く内密に讀むことのできる、特權的な執筆者集團が、「批林批孔」運動と同様に、存在していたのであろう。そして、その執筆者集團は、「批林批孔」運動のさいのそれらであった。そのことは、このあと氾濫する批判論文の筆者名が、「批林批孔」運動をつうじて讀者にすでに記憶されているものが多いことから、推測されるのである。

すなわち、執筆者集團のペンネームであるところの、

北京大學・清華大學大批判組

梁 效

翟 青

柏 青

羅思鼎

聞 軍

紅 宣

江 天      康 立

などが、それである。

「批林批孔」運動で活躍している學者が、ふたたび本名で論文を発表してもいる。

すなわち、

楊榮國

劉大杰

劉夢溪

などである。

これらの筆名、本名のほか、新しく登場した筆名もまじえ、七五年の年内いっぱい、『人民日報』、『光明日報』にもものしい題名をかかげて、掲載された。批判論文の掲載されない日はなかったから、この二紙だけで、論文の数は二百篇をこえることになる。

それは、この二つの新聞のうえで二百篇あったが、二つの新聞をみなければ読まずにすんだ、という性質の二百篇ではない。ガン細胞が増殖するように地方の新聞が轉載し、職場の黑板报新聞、壁新聞が引用、轉載し、いやでもどこかで眼につくものであった。いたるところにスローガンがあふれ、その注釋として二百篇があるということであった。小冊子、ポスター、ポケット版の繪本、あらゆる新聞雜誌、放送、講演、訓話等々をつうじて、宣傳がおしよせてくるなかの、二百篇なのであった。<sup>⑩</sup>

七六年にはいると、さすがに論文の数は減少したが、しかし論文の調子はいかわらず猛烈なものであった。

七六年にはいって、『水滸傳』批判の論文が減少したのは、ほかにも言論活動の題目があらわれたからであって、教育革命にかんする大辯論、「三項の指示を綱とせよ」<sup>おまつな</sup>批判、文藝界のまきかえし批判、洋奴哲學批判、鄧小平の失脚にともなう名ざしの鄧小平批判などがあたらしく紙面に登場し、これにゆずらざるをえなかったのである。

鄧小平がいっさいの公職を剝奪されたのは四月七日である。この日、中共中央は二つの決議を、それぞれ採擇した。ひとつは、國務院總理代行の華國鋒を黨中央委第一副主席、國務院總理に任じるもの、もうひとつは、鄧小平の黨内外のいっさいの職務を取消す（原文は「撤銷」）ものであって、これらはいずれも翌日の『人民日報』、『光明日報』に掲載されたが、その『人

民日報』の第三面は、鄧小平こそは宋江である、現代投降派である、とする數篇の論文をもって一ページを埋めたのである。<sup>①</sup>數カ月らいおこなわれてきた『水滸傳』批判、宋江批判が、ここでようやく正體をあらわしたといえよう。(ただし、清華大學の壁新聞を外國記者団などに閱覽させることは、すでに二月二十日におこなわれ、そのさい、口頭の説明では、批判の對象は鄧小平である旨が明確に暗示されていた。)

この批判運動の政治的意圖が鄧小平を批判・打倒するところにあつた以上、鄧小平の失脚によつてその目的は達成されたわけであり、批判運動が姿を消すのが、自然ななりゆきというものであろう。じじつ、批判論文は、五月以降、めだつて減少している。にもかかわらず、なお掲載がつづいたのは、その失脚後も残る鄧小平の影響力を恐れたものであることはいうまでもないが、いっぽうでは、鄧小平の失脚がただちに「四人組」による權力掌握につながらなかつたからである。『水滸傳』批判は、つぎの打倒目標をもとめつつ繼續されたのである。

その、つぎの打倒目標は、華國鋒であつた。暗に華國鋒を攻撃した文章は、かれが周恩來の死去のあと、總理代行に任命されると、「批林批孔」運動と『水滸傳』批判運動の、それぞれの系列に屬する論文が出現した。前者は『人民日報』二月二十四日に、後者は『光明日報』同二十八日に、それぞれ掲載された。<sup>②</sup>

華國鋒が總理代行に任命されたのは、ただ二月中としかわからないが、これの黨内にたいする通達は、二月三日付である。それから三週間あまりたつて、「四人組」が腐心した文章が出現したわけであつた。

『水滸傳』・宋江にたいする批判運動は、あらまし以上のような經過をたどつて展開したが、「四人組」が逮捕されると、意外にも、もともと毛澤東は、張春橋や江青に反省をうながす意圖があつて、これを指示したのだ、という説が流布された。その説は、出所をはつきりと明示しないが、北京駐在の日本人記者が、「四人組」が逮捕されたのは、權力奪取の陰謀をたくらんでいたからであり、その陰謀計畫の首謀者は張春橋であつた、という趣旨の説明を中國のしかるべき筋からきき、さらに自分の推理をくわえて、打電してきた記事のなかでのべられている。



そこでは、『水滸傳』批判」という用語ではなく、『水滸傳』學習」という用語が使われている。そして、これについては、最初の論文が發表される數カ月まえに毛澤東の指示があった、というのである。

《毛主席は昨年（一九七五年）春、水滸傳學習を指示、北京大學などで準備が始った。水滸傳の主人公・宋江イコール投降派とするキャンペーンは同年八月公開されたが、宋江批判は鄧小平批判へと結びつけられていた。》

いわれているとおりの事實があったのかもしれない。『紅旗』九期が小特集をくみ、それと前後して、連日、『人民日報』、『光明日報』に批判論文を掲載するためには、それ相應の準備が必要であつたらう。そして、このような事情をあきらかにした中國側が、なぜ「批判」といわず「學習」といったかというところ、毛澤東の「眞意」は「含みの多いもの」であつたとする、以下の説明とからむのだとおもわれる。毛澤東は必らずしも鄧小平「批判」を意圖していなかったのだ、というのである。

それなら、毛澤東は、「四人組」批判を意圖していたのかといえ、この「消息筋」は、多分にそれを匂わせつつ、しかし、明白に斷定しているようでもない。すなわち、「四人組」にたいして「批判」をくわえるよりは、「學習」を期待したのだ、という趣旨のようである。しかし、毛澤東の寓意は、「四人組」、とりわけ、張春橋と江青を指向していた、といっているようにとれる。「四人組」逮捕から三週間もたっていない當時、この程度しか、内情を語ることができなかったのかもしれない。（しかしまた、はたして、この「消息筋」が、どの程度内情に通じていたかどうか、疑問でもある。）

《消息筋によると、同學習を指示した毛主席の眞意は、この古典小説のなかの人物から革命推進の教訓を學べという含みの多いもので、對象を鄧氏に絞ったものではなく、むしろ張（張春橋）、江青兩氏が宋江の野心的な一面をわが身に照らす必要のほうに重點があつたという。

つまり宋江が農民蜂起の指導者になつたのは、皇帝に近づき、地主階級としての實權をつかむための野心からだったといい、とくに後期の宋江は、農民蜂起を彈壓するばかりか、仲間の毒殺など、手段をえらばなかった。これは文革の旗手になり、さらに大きな野心のため、政治局員の暗殺を企圖した張春橋氏と、結果としてなんと類似點が多いことか。》

要するに、「類似點が多い」ということにとどまる。右につづく、つぎの敘述は、「消息筋」が語ったものか、記者の推理によるものかさだかではないが、『水滸傳』批判は張春橋批判であつたとうけとってもらいたい、という趣旨であろう。

《十月》二十一日付『人民日報』の任平論文は、張氏を「まぎれもない老投降派」と呼び、宋江の「投降主義」とは張氏であることを明確にした。毛主席の暗示は不幸にも的中したのである。<sup>(13)</sup>》

はたして、毛澤東は當時、「四人組」、とりわけ江青夫人や張春橋に反省をうながそうとしていたのであろうか。また、この批判運動は、ただそのようにのみ——すなわち、それは「學習」運動であつた、張春橋・江青の反省をうながすものであつた、毛澤東は含みの多い提案をしたにすぎない、しかし、毛澤東の暗示は的中した、とのみ——うけとつてよいのであろうか。われわれは、批判運動の内容——批判の論點、および批判と現實過程の對應——を検討しなければならない。

## 二 批判の論點

すでにのべたように、『水滸傳』を論評した毛澤東のことばが公表されたのは、一九七五年九月四日であつたが、それより以前に發表された批判論文は、毛澤東のことばが提起した論點を含んでいるのである。

解放軍論文とわたしがいう最初の論文、『水滸』は投降主義を宣揚する反面教材である」は、論點を毛澤東におおいでいることはもとより、もともと毛澤東のことばが短いためか、そっくり論文のなかに毛澤東のことばをとりこんでいる。すなわち、毛澤東のことばであることを明示せずに、毛澤東を「引用」している。

つぎに解放軍論文を要約してかかげよう。傍點を付したのは、毛澤東からの「引用」部分である。番號は原文にはないが、以下の記述の便宜上、付した。

《(1) 投降主義は『水滸』全書をつらぬく一本の主線である。それは、招安を農民蜂起の唯一の出口として描いている。

投降派とはなにか、投降主義路線とはなにか、それがどのように革命の成果を消滅させたかを、われわれにわからせてくれる。『水滸』は、すぐれた反面教材である。

(2) 『水滸』が宣揚する投降主義路線は、ただ悪徳官吏に反くだけで、皇帝には反かないという根本問題にあらわれている。宋江をはじめとする投降派の一群は、多數は農民蜂起の隊列にまぎれこんだ中小地主と失意の官吏であって、盧俊義のような大地主さえいる。かれらと高俅を代表とする大官僚支配集団のあいだの闘争は、地主階級内部のこちらの派があちらの派に反対するといった闘争であって、「在野派」と「在朝派」のあいだの闘争であり、「餓えた犬」と「満腹した犬」のあいだの闘争である。

(3) 宋江からすれば、皇帝に反かないのは、招安を勝ちとるためである。「官吏になりたけりや、殺人放火して招安をうけるがよい」という諺は、宋江の投降主義者としての本質を描きだしている。武松が二龍山に身をよせようとしたとき、宋江はかれを見送って、くりかえし念をおした。「朝廷から招安をうけたら、魯智深、楊志を説得して投降するがよい」。梁山にたてこもってからも、「しばらくここに難を避け、朝廷が特赦招安してくれるのを待とう」といつている。

(4) 晁蓋の「聚義廳」を「忠義堂」と改めたのは、招安を勝ちとる投降主義路線をもって農民軍の革命路線にとりかえる、宋江の重要な段どりであった。「聚義」には互いに援助し、団結して壓迫に反抗するという意味がある。農民蜂起がおこなった多くの反抗闘争は、「聚義」のかたちをもって發動されている。宋江は晁蓋が犠牲になったあと、第一位の椅子に坐った。そしてすぐさま、孔老二の「名を正す」衣鉢をひろいあげて、「聚義」を「忠義」と改めた。これによって、「義」は「忠」に従属するものとなり、「義」の本来の含義は去勢されて、農民革命軍の革命路線は篡奪され、改められた。こんにちのわれわれの用語でいえば、修正主義をやったのである。かれが「忠義」の二字をかかげたことによって、「天に替って道を行う」も、皇帝に替って道を行う、になってしまった。

(5) 宋江は農民軍の指導権をぬすみとったあと、招安を實現するために、さまざまな手をうった。まず、何回か大き

な戦闘をやつて影響力を擴大し、隊伍を充實させて招安をたたかいとる資本をつみたてた。菊花會の機會に、投降を匂わせた歌をうたい、李逵を斬罪に處すると脅し、農民蜂起軍のなかの投降を願わない革命勢力に打撃をあたえた。東京までかけていって、妓女李師師の裏口をくぐり、皇帝から招安の赦免状をもらおうとした。のちに朝廷が使者を派遣して、二度も李逵らに妨害されると、宋江は恥しらずにも獻策して、農民軍を投降させた。しかし、投降に反対して去つていったものが三千から五千おり、宋江に従つて投降したものは、五百から七百の數しかなかった。

(6) 宋江は投降すると、さっそく方臘討伐にでかけた。宋江は自分の立身出世のために、李逵らがふたたび梁山にのぼつて旗あげしようという提案を壓えつけたばかりか、自分からすすんで方臘の指導する農民蜂起を鎮壓したいと求めた。宋江のえた褒賞と高官は、農民蜂起の多くの戦士の鮮血とひきかえられたものである。しかし、革命を裏切つた人間の末路はみじめなもので、實權派はかれに「恩賜」の毒酒をとどけてきた。そのような場においても、宋江はなお、李逵に造反をやらせまいとして、李逵を欺いて毒殺した。

(7) 梁山泊の農民蜂起が失敗したのは、主として一點にある。すなわち、農民蜂起の隊伍の指導權を宋江のような地主階級の野心家・陰謀家に篡奪され、かれに農民蜂起を賣渡す投降主義路線をおしすすめることを許したことにある。農民蜂起軍にも、すぐれた人間はいて、李逵、吳用、阮氏の三兄弟らは宋江とその投降路線に反抗している。しかし、『水滸傳』の作者には階級的偏見があり、蜂起した農民にたいして歪曲をくわえている。たとえば、招安に反対して宋江を怒らせてしまった李逵は、宋江がかれの首を斬れという命令を下すと、あわれにもひざまずいて、「兄貴、八つ裂きにしても怨まないぜ、殺しても憎まないぜ」というのである。さらに、招安をうけたあと、李逵をして方臘蜂起軍を殺させている。こうしたことは、作者の階級的立場の反動性を暴露するものである。

(8) 解放以後の一部の古典文學研究者の評論は、マルクス主義の基本的態度からはなれ、魯迅の論述にもそむき、『水滸傳』が肯定している宋江の投降主義路線を美化し、賞讃さえした。文革のあと、批判を加える評論がでたが、しか

し、急所をしつかりとつかんでいなかった。』

以上のように、論文の主要な論点八項目のうち六項目までが、毛澤東の論点と一致する。しかも、毛澤東のことばは、ほとんど「引用」されていて、「引用」されていないのは、『水滸』という書物は絶妙であるが、どこが絶妙かといえれば投降するところだ』（『水滸』這部書、好就好在投降。）という一句だけである。

「引用」されなかったこのことばは、いかにも個性的でいきいきしており、しかも皮肉たっぷりである。規格にはまった評論にはめこむと、この文句だけがきわだち、ほかの部分と調和がとれない。それで、「引用」できなかったのであろう。ただし、わたしが「絶妙」であると譯した原文「好」は、要約（1）の末尾「すぐれた」の原文が「好」であるから、ここへもってきて「引用」したと、とれなくもない。もしそうだとすれば、苦心のあげくの處理であろう。

「反面教材にして、人民にもれなく投降派だと知らせるがいい」（『做反面教材、使人民都知道投降派。』）は、「……にして、人民にもれなく……知らせるがいい」が脱落しているだけで、「反面教材」、「投降派」は「引用」されている。

このように、解放軍論文が毛澤東のことばと一致していた——むしろ、とりこんでいた——ことは、不思議ではない。まえにのべたように、執筆者らには、内密に毛澤東のことばが傳達されていたのである。第一陣をうけたまわった執筆者は、その光榮に恐懼して緊張したため、すでにみたようなかたくり、忠實な「引用」しかできなかったにちがいない。しかし、第一陣の論文としては、このように、網羅的であることも必要であったかもしれない。とにかくかれらは、論文執筆の命をうけて、一週間ほどで書きあげたのである。（毛澤東がこのことばをのべたのは七五年八月十三日で、姚文元がそのメモを入手したのは翌日、論文が掲載されたのは二十三日である。）

さすがに、この解放軍論文からあと、かくも忠實に毛澤東のことばを「引用」したものは、みられない。というのは、まもなく毛澤東のことばが公表されたので、批判論文はその引用にあたっては、ゴシックで明示することになり、したがって、それぞれが毛澤東の論点の、一つ、あるいは二つをとりあげればよい、という餘裕が、かえって生じたのである。

『水滸傳』批判の論文の論點を提供したのは、毛澤東ばかりでなく、魯迅もそうであつて、魯迅に依據して議論を展開した論文としては、方岩梁「人民にもれなく投降派だと知らせるがいい」があり、まえにもあげた『紅旗』九期に掲載されている。しかし、これも論文の表題にみられるとおり、毛澤東の提起した論點、および、そのことばを無視していないのである。

『水滸傳』を論評するとき、毛澤東はただ『水滸傳』だけを念頭においていたのだろうか。わたしは、毛澤東のことばは、南開大學論文にたいする批判的見解としてのべられたのではないか、とおもう。まえにもあげた、『水滸』の思想と藝術」と題する南開大學論文を、毛澤東のことばと照合して讀むと、毛澤東の論點は、南開大學論文の急所をあまりにもよく衝いてゐる。そして、全體として、南開大學論文にたいする不滿の意がこめられているように感じられるのである。

毛澤東は、ここでは『水滸傳』という書物は全體として、「反面教材」である、という見解に立っている。讀むな、といつてゐるのではないが、批判をくわえつつ讀まなければならない書物だ、というわけである。南開大學論文を一讀して氣がつくことは、『水滸傳』に部分的批判をくわえつつも、全體としては、肯定的評價を下していることである。この論文の討議に參加し、執筆したひとびとにとっては、「反面教材」などという論斷は、夢にもおもいつかなかつたにちがいない。

南開大學論文は、末尾において、つぎのようにまとめている。

『水滸』は畏るることなき革命精神をもつて歴史の光明面をうたいあげた。こうした「文學藝術のすぐれた傳統は、われわれは繼承しなければならない」。プロレタリア階級の革命文藝は、人民を團結し、人民を教育し、敵に打撃をあたえ、敵を消滅させる有力な武器である。<sup>(14)</sup>

《歴史經驗（文藝による歴史經驗を含む）は、われわれの歴史辨證法にたいする理解を増進させるであらう。したがつて、われわれは『水滸』を歴史として讀むべきである。》<sup>(15)</sup>

毛澤東の提起した論點、（1）『水滸傳』の絶妙なところは投降にある（2）反面教材である（3）ひろく投降派であることを知らせよ、が、これとまったく反對のものであることはいふまでもない。

また、毛澤東がそれにつづけてのべた、(4) 惡徳官吏には反くが、皇帝には反かない (5) 晁蓋を百八人の外に屏けた (6) 宋江は投降して修正主義をやり、晁の聚義廳を忠義堂と改名し、招安されてしまった (7) 宋江と高俅の闘争は、地主階級内部の派閥闘争だ (8) 宋江は投降すると方臘討伐にでかけていった、の諸點のうち、(4)、(7) が、南開大學論文とまっこうから對立している。(5) は南開大學論文はのべていず、(6)、(8) は事實にたいする認識は一致しながら、評價においては對立している。

(4) について、南開大學論文をみてみよう。これは(7)にも關係するのである。

『水滸』構成上の主線は、蜂起した英雄的人物が、どのように四方八方から梁山泊に集つてきて、強大な武裝部隊を形成し、宋朝の反動政府に對抗したかにある。長編の構成の開始は、「亂はお上がしでかしたもの」、<sup>(15)</sup>「官が逼り民が反く」ということをきわだたせるために、作者はまず批判の矛先きを、はばかりとなく宋の徽宗趙佶にむけている。』

すなわち、南開大學論文は、「ただ惡徳官吏に反くだけで、皇帝には反かない」といった觀點をとらないのである。したがって、右に引用した部分にすぐひきつづいておこなわれているつぎの高俅についての記述は、皇帝を頂點とする高官集團という把握なのであらう。

『まさに、この放蕩ものの皇帝のおだてにのつて、高俅、蔡京、童貫ら“六賊”をはじめとする、大地主階級の利益を代表する官僚支配集團は、朝政をにぎり、官職や位階を賣り、人民をしぼりあげ、惡のかぎりを盡した。“没落した子弟で浮浪兒”であるところの高俅はたまたま蹴毬の巧者であつたところから皇帝のお氣にいりとなり、半年のうちに殿帥府太尉に昇進した。』

以下、高俅につながる高衙内、高廉、さらには、蔡京、童貫、蔡得章、梁世杰、賀太守、等々をあげているが、これは、しばらくおく。この段落は、皇帝を頂點とする高官集團を、まとめて記述している。したがって言外の意味は、これに對立するのが、宋江らである、ということにならう。

南開大學論文は、この高官集團と宋江らの對立を階級闘争とみているようである。この段落のすぐまえの段落で、『水滸傳』は、階級闘争を描いている、といっている。

《第一に、『水滸』は比較的に深刻に、殘酷な階級的壓迫が農民蜂起をつくりだした基本的原因であつたことを示している。小説は人物と事件の描寫をつうじて、客觀上、壓迫のあるところ反抗あり、といった階級闘争の歴史的法則を反映している。<sup>(18)</sup>》

すなわち、宋江は高俅にたいして階級闘争をしかけていたのだ、ということにならざるをえない見解であるが、毛澤東の論斷(7)はこれを否定しているのである。

では、毛澤東の論點(6)、(8)についてはどうだろうか。

毛澤東の論斷からすれば、(6)でいう「修正主義」も、(8)でいう「方臘討伐」も、まことに重大な階級的な裏切りだ、とならざるをえない。南開大學論文は、宋江を讚美してはいないが、しかしだからといって、修正主義をやった、などと非難してはいない。そこに、ある對立があることはみとめるが、毛澤東のように、〈正しい階級的立場〉對〈修正主義〉、または、〈正しい階級的立場〉對〈階級的裏切り〉、といった對立ではなく、〈招安(歸順の要請をうけいれる立場)〉對〈反招安(歸順の要請をうけない立場)〉という對立だとみている。

〈招安〉對〈反招安〉の對立も、議論を演繹していけば、けっきよくは毛澤東の斷定にゆきつくのかもしれないが、しかし、當時の用語を使って圖式化しているところは含蓄がある。すなわち、〈招安〉はあくまでも〈招安〉であつて、〈修正主義〉などというものではない、という主張がそこにみられる。もとより、南開大學論文が執筆されたとき、〈招安〉Ⅱ〈修正主義〉といた、手ぎびしい評論はまだ出現していないのであるから、南開大學論文に論争的な姿勢を讀みとめることは、かえって眞意をまちがえてうけとることにならう。しかし、南開大學論文が、文學作品を讀むとき、その時代のなかに位置させて讀む、という態度を是としていることは、否定できない。



ある運動が成長、擴大するとき、それにつれて参加者のなかに不純分子——運動の初心と異なる考えをもった人間——が増えることは、ありうる。おそらく、梁山泊にもそのような傾向がみられたであろうと想像される。そして、そこから「招安」と「反招安」の對立がでてきた、というのが、南開大學論文の發想である。

南開大學論文は要約すればつぎのようにいつている。

《蜂起の隊伍の擴大と農民政權の發展につれ、農民蜂起軍に参加したもののなかには、地主の武装兵力、または政府軍だったのが捕虜になったものや投降してきたものがいて、かれらは封建主義思想をもつて、農民政權を改造しようとした。そこで、封建王朝に對處する態度、革命義軍の前途、といった問題をめぐつて根本的に對立する二つの思想と路線が鬭争するようになった。具體的には、招安か反招安かで、尖鋭に對立鬭争した。<sup>(19)</sup>》

「招安」、「反招安」が、はたして、二つの思想と路線などという現代的な用語で割切れるほどの對立であるか否かはべつとして、いちおう、そのような論争があつたことは、まとめられよう。

この鬭争は、農民蜂起軍の領袖である宋江のうえに集中的にあらわれた、と南開大學論文は、要約すると、つぎのようになっている。

《宋江は中小地主階級出身の知識分子で、鄆城縣で押司の職にあつたが、人民に同情をもち、苦しんでいる人間をよく助けてやつたので「あつらえむきの雨」(及時雨)とあだ名され、民衆の人氣があつた。かれは潯陽樓に反詩を題して死刑の判決をうけたが、梁山の英雄に救出され、ようやく反抗する決意をもち、農民蜂起の浪にまぎこまれるにいたつた。<sup>(20)</sup>》

宋江は時代の浪にまぎこまれたのだ、というのである。梁山にたてこもつてから、宋江は適切な措置をほどこし、數回の政府軍の包圍討伐を撃退したが、それも《「獨自の天分」があつたからではない。》《宋江は當時の革命の激流のなかで、大衆の代表として政治の舞臺にあがつたのであり、大衆の智慧と才能を集中したから、農民蜂起軍のなかで、すぐれた指導力と組織力をあらわしたのである。<sup>(21)</sup>》

しかしながら、宋江が農民蜂起の闘士として一貫したのでないことは、『水滸傳』が描いている。そこで、かれには、「階級的限界性」があったし、それはかれの「思想的動搖性」につながったと指摘するのである。

すなわち、宋江の思想的立場のなかには、ゆゆしい階級的限界性がある。その出身と教養から、かれには封建的正統觀念と忠孝思想があり、皇帝に幻想をいだき、政治が暗黒であるのは姦臣のせいであるとおもっていた。かれは晁蓋を逃がしてやつたものの、晁蓋らが官軍をうちやぶった行爲は、九族を滅すべき仕業だと考えた。梁山にのぼってから、「朝廷の招安を待ち、忠を盡し力を竭して國に報じるのだ」とくりかえしのべている。招安をうけようとする思想的立場は、宋江の行動をつらぬいている。農民蜂起の勢力が擴大するにつれ、支配階級から分化した人間が多數参加するようになったが、かれらは機會があれば、以前の生活にもどりたいと望んでいた。それは宋江の思想的動搖性にいつそう影響をあたえた。――

南開大學論文は、以上のように、宋江の階級的限界性と思想的動搖性の由來するところを説明したあと、つぎのようにいう。

《ここから、われわれは、宋江が農民蜂起事業の發展興隆の重要な要素であるとともに、逆に農民蜂起が變質する重要な要素であったことをみるであろう。宋江は思想のなかの複雑で矛盾するすべてを革命陣營内にもちこんだ。しかも、かれの思想におけるすべての矛盾は、かれの行動に織りなされ、かれの指導路線にあらわれてもいた。宋江のこうした矛盾する思想的立場から、われわれには蜂起軍の歴史的悲劇が預感されるのである。》<sup>(2)</sup>

毛澤東にとって、南開大學論文の見解は、まことに齒がゆいもの、なまぬるいもの、それこそ修正主義的なものであったろう。

九月四日の人民日報社説が、そのなかで、つぎのようにいつているのは、多分に毛澤東の見解を代辯し、そのことばの不足を補っているのではないかとさえ、おもわれる。

《『水滸』が世に問われていらい、その主要な傾向がなんであるか、これまで諸説紛紛たるものがあつた。解放以後、一部の人間から「千古不朽の農民革命の史詩」であると奉られ、はなはだしきは、宋江を代表とする地主階級を益する投降

主義路線でさえも、議論の餘地なき「農民の限界性」といわれ、かつ、こうした觀點が「史的唯物論的觀點」だと稱された。<sup>(23)</sup>

毛澤東の論點は、それぞれがきりはなせないものである。

毛澤東の論點のうち、(6)の聚義廳を忠義堂と改名したことについては、南開大學論文も論及しているが、しかし、毛澤東の論點(1)～(8)は、毛澤東の見解としてはすべて相互にからみあっているものであつて、そのなかの一、二が一致したとしても、もともと全體的評價が對立している以上、その一致はかえつて兩者の相異をきわだたせる役割しかない。とりわけ南開大學論文がとりあげない(5)の「晁蓋を百八人の外に屏けた」宋江の行爲は、後繼者に心をくだいてきた毛澤東にとつて、心外ともいふべき行爲であつて、小説中のできごととして等閑視することはできなかったであらう。ここに、宋江の階級的裏切りがある、と毛澤東は感じたにちがいない。ここに着眼して『水滸傳』を読むなら、當然、(1)～(4)、(6)～(8)のつながりある評價になるはずだ、と毛澤東はおもつたにちがいない。まことに、(5)に着眼した毛澤東は、毛澤東的な毛澤東であつた。

ところで、この南開大學論文にたいして、いちはやく反論をくわえたのが、歸郷知識青年・趙安亭であることは、まえにものべた。

一九七三年末に、南開大學は、かれの論文「叛徒の頌歌」、および手紙をうけとつている。この「叛徒の頌歌」は、『紅旗』九期に掲載されている(以下、趙安亭論文と稱する)。この掲載にあたって加筆されたかどうかについては、説明がない。また、毛澤東がかれの論文に眼をとおしたかどうかについても、説明がない。

趙安亭論文は、梁山泊に集つた人間を、はつきり「階級區分」したところに特色がある。かれはまず、梁山泊の「一百零八將」は階級出身から、勤勞人民出身と地主官僚出身に分け、前者の例として、李逵や阮氏三兄弟をあげ、後者の例として宋江をあげる。そして、階級的な戦線が異なるのだから、政治戦線も異なる、として、李逵を代表とする革命派は、宋王朝の轉覆

をはかった、これは正しい、徹底した革命路線である。宋江をかしらとする投降派は、修正主義をやる政治路線を提起し、ひたすら招安を待った、これは徹頭徹尾の投降路線である、という。『水滸』のなかの宋江は、農民蜂起の英雄ではなく、蜂起軍のなかにまぎれこみ、かつ指導権を篡奪した叛徒である。<sup>(24)</sup>

『水滸傳』が、もし農民革命戦争を描いた小説であるなら、李逵を代表とする英雄を賞讃すべきであるのに、むしろ歪曲をくわえ、醜惡化している、そして、逆に宋江 را ことを盡して賞讃し、美化している、と趙安亭論文は、いくつかの事例をあげる。《以上にのべたところを総合すると、『水滸』という書物が農民蜂起の英雄とその正しい路線をうたいあげているというのはウソであり、蜂起軍内部の叛徒とその投降路線をうたいあげているというのがマコトである。『水滸』の宋江にたいする描寫は叛徒の頌歌だといったところで、いささかも無實の罪におとし入れることにはならない。<sup>(25)</sup>》

趙安亭論文は、さらにいう。『水滸傳』は毒のある書物である。だが、毒もまた肥料になりうる。宋江と現代の劉少奇・林彪といったペテン師とは共通の特色があるから、『水滸』をよく読んで宋江の顔つきをはっきりと知るとは、劉少奇・林彪といったペテン師の顔をはっきりと知るうえで役立つ。《したがって、『水滸』はわれわれが思想・政治路線教育をすすめるうえで、すぐれた反面教材である。<sup>(26)</sup>》

しかし、——と趙安亭論文は補足する——『水滸傳』七十回本では、宋江の叛徒としての顔つきは、まださだかでなく、百二十回本において、宋江はあますところなく暴露される。したがって、百二十回本を出版すべきである。

この趙安亭論文は、意外にも、毛澤東の論點と符合する。

趙安亭論文は全體の調子としては、宋江を「叛徒」と指摘し、『水滸傳』を宋江の「頌歌」であると否定的に評價するところに主眼があるから、論文の初稿は、おおむねこの線で執筆されていて、いよいよ『紅旗』に掲載するにあたって、毛澤東の指摘に沿って加筆したのかもしれない。

一九五四年の『紅樓夢』研究批判は、無名の青年、李希凡たちの論文に毛澤東が注目し、かれらと連絡したことからはじま

っている。趙安亭論文が、そのような導火線の役割をになわされた可能性がなくはない。しかし、これは、批判運動にさきだって、先驅的に發表されるということもなく、批判運動のなかで、趙安亭がもてはやされて特別な位置を占めた形跡もなく、また「四人組」逮捕のあと、「四人組」につながる人間として非難されるということもなかった。

いずれにもせよ、南開大學中文系古典文學教研室の『『水滸』の思想と藝術』の論旨が、『水滸傳』批判運動をおしすすめる批判者側にとって、かつこの攻撃目標となったことは、ほぼ疑えないようにおもわれる。にもかかわらず、南開大學の同研究室が、露骨な打倒目標とならなかったのは、趙安亭の論文を無視することなく、訂正論文を發表するなど、批判運動に協力する態度を示したからであろう。

### 三 批判と現實過程

いわゆる「四人組」が逮捕されて、『水滸傳』批判運動は終ったが、しかしなお、これに關連する論文は出現した。それらの論文が攻撃する矛先きは逆轉して、從來、他者を批判するばかりであったが、こんどは批判の對象となり、その一環として、批判運動の真相があきらかにされるようになったからである（真相があきらかにされるようになったのは、『水滸傳』批判運動にかぎらない）。

七八年八月、『人民日報』に掲載された、人民文學出版社古典文學編集室と同紙文藝部の共同執筆の論文によると（以下、同論文を古典編集室論文と呼ぶ）、毛澤東のことばは、まったく學術的な問題として語られたものであった。

《一九七五年八月十三日、ある教師が毛主席にむかい、いくつかの古典小説の評價にかんする問題について、教えを乞うた。毛主席はまず『三國演義』、『紅樓夢』などの作品について語り、それからまた『水滸』についても語った。

毛主席は、この教師が提起した、『『水滸』という書物のよいところはどこにありますか』という問題を正面からとりあ

げて、『水滸』にたいして、精彩を放つ批評をくわえた。

當事者の回想によると、毛主席が『水滸』を語ったときは、完全に學術問題として検討をくわえたのである。批評をくわえるにさいしては、かれは博引旁證、談笑しつつおこなった。あきらかに、『水滸』の評價問題にかんするあのことは、全黨全國人民のなかに『水滸』を批判し、現實生活における宋江をつきだす運動をまき起そうとする意圖は、いささかもなかったのである。<sup>(27)</sup>

もし、これが事實であるとすれば、“四人組”逮捕の直後、北京の消息筋が語ったという、毛澤東は張春橋や江青を批判するつもりで、『水滸傳』・宋江を論評したのだ、という説明も成立しないことになる。

當時の情勢のなかで、毛澤東がまったく學術的に『水滸傳』を語るだろうか。だが、その毛澤東のことばをきいた當事者である、北京大學中文系講師・蘆荻はつぎのように回想している。

「蘆荻は、主席に教えを乞うた。

『『水滸』という書物のよいところはどこにあるのですか。どのように讀むべきですか」

主席はそこで、のちに發表になった、『水滸』を批評したことばを語った。

毛主席の『水滸』にたいする論評の全文は、蘆荻が命を奉じて整理したものであって、そのおり、毛主席が書いた原文と談話の記録にもとづいている。

蘆荻は記者に語った。毛主席の『水滸』評は、まったく『水滸』という小説について語ったのであって、ほかの意味はまったくない。一九七五年九月末、彼女は中南海をはなれるまえ、主席醫療組の同志に、どのように毛主席の『水滸』評を理解するかについて授業をおこなったが、そのさい、とくに説明をくわえた。現在ある人が黨内に投降派がいる、現代の投降派をつかまなければならない、といったているが、毛主席にはまったくそういう考えはなかった、と。<sup>(28)</sup>

蘆荻は、はたして當時の事情をあますところなく語っているのだろうか。

彼女が、毛澤東には批判運動を發動する意圖はなかった、と語ったのは、七五年九月末のことである。當時まだ「四人組」は健在であったから、彼女が「四人組」逮捕以後の情勢に迎合して、右のことを語ったとは、おもえない。だが、彼女が新華社記者に語った内容（もしくは新華社記者がまとめた内容）から、古典編集室論文が、「談笑しつつおこなった」（「談笑風生」）という、そのときの毛澤東の談論風發ぶりを再現することはできない。

いきなり話題が古典小説にいったのだろうか。そうだとすれば、われわれがすでにみたように、毛澤東のことばが、南開大學論文の主たる論旨に對應しているのはなぜだろうか。蘆荻がどのようにして毛澤東のことばをひきだしたかはわからないが、彼女はおそらく南開大學論文の、少なくともその論旨を毛澤東にたいして語ったのだろう。それは、當時、公認された一般的な評價というものであったから、わざわざ「南開大學論文によれば」ということをわりをいれずに、自分の意見、あるいは大學における教學の方針として、語ったとおもわれる。それにたいして毛澤東が答えたことばが、おもいもかけず『水滸傳』批判となつて雷鳴のようにとどろきだした。彼女としては事態の進展に驚き、補足的な辯明をのべておく必要を感じ、それが七五年九月末、病床の毛澤東を看護するひとびとにたいしてのべられたのではないか。

こまかな経緯はべつとして、南開大學論文の論旨が、當時、妥當なものとして一般的にみとめられたものであったことは、當時の社會狀況からして否定できない。この論文は、もともと當時の社會狀況を母體にしてうまれたものであるからである。それはまた、ひるがえって、當時の社會狀況を肯定するために（直接に、ではないが）役立つ趣旨のものであった。少なくとも、當時の社會狀況を攻撃する性質のものではなかった。

南開大學論文は、一九七三年七月、人民文學出版社から刊行の『四つの古典小説の評論』という、百五十ページの小冊子に收録されたものである。ほかに、『三國演義』、『西遊記』、『紅樓夢』にかんする評論も收録されている。<sup>(20)</sup>

この小冊子は、おそらく周恩來の示唆のもとに出版されたものであろう。

この前年、一九七二年二月に、ニクソン・アメリカ大統領、九月に、田中角榮・日本總理大臣が中國を訪問して、中國の外

交政策の大きな轉換を世界に印象づけた。外交の轉換と歩調をあわせるようにして、國內の社會的雰囲気にも變化がぎざした。その變化を報道する北京電を掲載したある日本の新聞見出しは、「急ピッチに進む雪どけ」となっていた。その變化の第一は、古典が解禁されたことである。

『西遊記』『三國志』『紅樓夢』などの中國の古典が文化革命以來、はじめて北京の書店に姿をみせた。こういった古典が書店のショーウィンドーに並べられると、たちまち人だかりができたが、これらの書籍が中國人にも販賣されるのかどうかは不明である。

いずれも十年以上前に印刷されたものばかりで、大部分一九五九年印刷という奥付けがついている。これらの書籍は、前から持ち越していた在庫本で、當局が再び市販することに決めたもののようなのだ。

価格は中國人の収入からすると比較的高價で、記者（AFPピエール・コンパレー記者）は十一ドル相當の代金を拂って九冊買った。<sup>(30)</sup>

日本人記者によると、このときに賣出されたのは『紅樓夢』全四冊、『三國志演義』上下、『水滸傳』上下、『西遊記』上下、『儒林外史』などで、いずれも人民文學出版社發行、『紅樓夢』は六四年出版、ほかは六二年出版。以上のほか『石頭記』上海商務印書館五九年版も店頭に並んだ。これらの書籍は中國人にも販賣され、《店員の話によると、これが賣切れれば、新しく出版する計畫だという。<sup>(31)</sup>》

右の報道がいう『水滸傳』上下の一九六二年版は、じつはのちにふれる一九五二年十月に第一版、五三年に第二版をだしたもので、<sup>(32)</sup>六二年出版というのは、何回めかの印刷、われわれのいう増刷がおこなわれた年であろう。いずれにせよ、十年ぶりに店頭で讀者におめみえたことは、かわらない。

それは、文革中、印刷する（増刷する）ことはもとより、販賣することもできなかったことを物語っている。（したがって、公然と読むことも、はばかられたであろう。）これらの古典小説が、ひさびさに姿をあらわしたときの、民衆の狂喜は想像す



るにあまりがある。

『水滸傳』でいうと、十年まえの在庫品はたちまち賣切れたようである。右の新聞報道からわずか二カ月たったあと、新しく増刷されたものを、われわれはみることができた。「一九七二年四月北京第一〇次印刷」と奥付けに記された『水滸』上下二冊がそれである。また、「一九七三年十一月北京第一次印刷」と記されたものもみることができた。

讀者の歡迎ぶりが、この増刷の様子にうかがえるとしても、文革中は「禁書」であったこれらの古典小説の再出現に、民衆のなかにはとまどいを感じるものもいたであろう。反撥もあったかもしれない。

そこで、これらの古典小説をどのように読むか（それらは、けっきょく讀んでもよい本だと讀者を安心させる）手引きが至急必要とされたにちがいない。『四つの古典小説の評論』という小冊子は、こうして七三年七月に出版されたのだとおもわれる。

したがってそれは、文革期に流行した、「四舊」と斷絶するというスローガンのもとでの、古典文學にたいする全面的な否定を是正する必要があった。あたかも傳統的なものや古典、文化遺産を否定した風潮にたいし、まず知ること、讀むこと、検討してみることが、宣傳、報道、啓蒙活動の主眼となった。『四つの古典小説の評論』の筆者たちは、そのような方向に沿って、評論を執筆し、しかも状況にあわせて、とり急ぎ執筆したのである。

このような状況、すなわち、〈脱文革〉的状況をつくりだすために、精力的にはたらいたのが、周恩來であった。周恩來は、文革で破壊された國家機構（むしろ行政機能というべきかもしれない）を再建するため、實際に行政上の手腕をそなえた人材を登用したが、それは、文革で失脚したひとびとのなかに求めるよりほかはなかった。こうして、失脚幹部の復活が〈脱文革〉的状況をもたらし、それはいっそう〈脱文革〉的状況をおしすすめたのである。その復活人事の最高潮が、鄧小平の復活である。

鄧小平の復活は、七三年四月十二日の夜、カンボジア國家元首・シアヌーク歡迎宴に姿をあらわすという、劇的な演出によ

って、國の内外に報じられた。

鄧小平は、復活した高級幹部のなかでは、過去の地位、履歴は最高であり、行政手腕も拔群である。文革を推進してきた〈文革派〉、とりわけ「四人組」江青らにとっては、かれの復活は情勢の變化を告げる信號としてうけとられたであろう。

「四人組」はこうした情勢の變化にたいして、「批林批孔」運動を發動して抵抗した。（この運動の發動は、鄧小平復活の約四カ月あとである。）翌七四年二月には、「批林批孔」運動を本格化し、〈脱文革〉傾向の有力な推進者である周恩來を暗に攻撃目標とした。しかし、周恩來はねばり強く、毛澤東の了解をかちとって、七五年一月、四期人民代表大會において「政府活動報告」をみずからおこない。四つの現代化の方向を提示した。鄧小平はこの代表大會のまえにひらかれた、中國共產黨の會議、十期二中全會で、中共副主席に選出され、四つの現代化の方向のもので、あたらしい工作方針をうちだしていった。「四人組」は、周恩來について、鄧小平をも攻撃目標にせざるをえなくなった。

『水滸傳』批判の最初の論文である解放軍論文が『光明日報』に掲載された七五年八月は、鄧小平が精力的にその手腕を發揮しはじめたときでもある。この七五年七、八、九月は、のちに「四人組」によって、「右翼まきかえし」風が猛烈に吹きまわった期間であるとされたが、これにたいし、「四人組」の側も八月から『水滸傳』・宋江批判を猛烈に展開したのである。

まず、『水滸傳』批判の先驅的なものとして、趙安亭論文がでた。これはすでにのべたように、『四つの古典小説の評論』のなかの、南開大學論文をとりあげて批判している。もし、「四人組」に示唆されたのではなく、かれが自發的に書いたのだとしたなら、この論文がでたのを知ったとき、おそらく「四人組」は驚喜したにちがいない。この『四つの古典小説の評論』を批判するなら、それはこの小冊子の出版の母體ともなり、出版を必要とした、當時の〈脱文革〉的状況を批判することになる。少なくともそのような批判を展開する可能性はある。なかでも、南開大學論文を批判するなら、これは周恩來にたいする示威にもなる。南開大學は、周恩來が一九一七年に卒業した南開中學が、さらに新しく一九一九年に設立したものであって、周恩來が一九二〇年十一月、フランスに出發するまで在學した母校だからである。<sup>(3)</sup>

趙安亭論文が南開大學に送付された七三年末ごろから、「四人組」は、南開大學論文を突破口とする、なんらかの批判運動を展開しようと模索しつつあったものとおもわれる。しかも、その模索はめだたないかたちではあったが、いくらかの行政的措置をともなっていた。

一九七四年、北京・外文出版社が刊行した日本語版『中國古典小說評論——『紅樓夢』ほか二編——』は、副題にもみられるように、三編の評論を集めたものであるが、三編は筆者も論文題名も『四つの古典小説の評論』とまったく同一であって、これが『四つの古典小説の評論』から、南開大學論文を削除して譯出したものであることは疑問の餘地はない。そして、『水滸傳』を論じたほかの論文を収録していないところから推して、南開大學論文だけがよくないというのではなく、『水滸傳』そのものにも、急には評論を執筆できないような問題のあることが意識されたのであろう。この本の奥付けが、ただ「一九七四年 初版發行」とのみ記して、月日を省略しているのも、なにか透明でないものの介在を感じさせる。

また、文革以後はじめて印刷されたとおもわれる『水滸』七二年四月第一〇次印刷本と、それにつづく七三年十一月第一次印刷本の巻頭の「再版説明」は異っており、第一次印刷本の「再版説明」は、趙安亭論文の見地をとりいれている。<sup>(34)</sup>

しかし、この時期、「四人組」の主たる精力は、「批林批孔」とそれにすぐつづく「儒法鬭争に學べ」の批判活動、組織活動にそそがれていて、社會運動としてのよりあがりはなかった。一般の眼にも、「水滸傳」批判の運動がはじまっているというふうには、映じなかったのである。とはいえ、すでにみたように、行政的措置によるものではあったが、南開大學論文を否定するうごきはあったのだから、潜行的には、『水滸傳』批判は社會的にも、ないわけではなかった。あるいは、「四人組」は、これを社會的運動としてよりあげようと意圖していたが、うまくゆかなかったのかもしれない。

そのような潜行的批判から約一年半以上も経過して、突如、ふってわいたとでも形容するほかはないかのよう、毛澤東の『水滸』を論評したことが出現したのである。趙安亭論文の出現したときにもまして、「四人組」は、欣喜雀躍したにちがいない（じじつ、欣喜雀躍したのである）。毛澤東と趙安亭では、役者がちがう以上のちがいがあり、毛澤東のことは、ま

た、適切無比、強力な武器となるものであった。

蘆荻はのべていないが、彼女は毛澤東との談話の記録をそのつど報告するように義務づけられていたようである。

一九七五年八月十三日の毛澤東の談話の内容は翌日、はやくも「四人組」の手にはいった。

前出の古典編集室論論文いう。

八月十四日、「四人組」は記録整理された『水滸傳』に坎する毛主席の談話の内容を手にいれたあと、三時間もたたず、いわゆる毛主席の指示を貫徹する「方法」を提出した<sup>(35)</sup>。

この姚文元の迅速な對應は、かれの欣喜雀躍ぶり、および南開大學論文を突破口に『水滸傳』批判の展開を意圖し模索しつつあったことを、いわずして物語っている。古典編集室論文はつづけていう。

《姚文元は林彪の手口を襲用、觀念論と形而上學をもちいる卑劣な手法をもちい、この談話は「中國共產黨人、中國プロレタリア階級、貧農・下層中農およびいっさいの革命大衆にとって、現在および將來において、今世紀およびつぎの世紀において」意義があるのだなどということをもっともらしく吹聴した。當日の深夜、姚文元は「四人組」が『人民日報』に配置してある腹心に電話してこのことを告げ、しつかり準備しておくようにいった。それとともに姚文元は、出版局の責任者をよびよせて、いそいで印刷し出版するよう命令した。

翌、八月十五日、姚文元は、『水滸傳』にたいする毛主席の論評の整理記録稿を、かれがでっちあげた、いわゆる毛主席の指示を「貫徹」するという手紙とともに、『人民日報』、『紅旗』および上海市委員會、北京市委員會内の親密な人間におくり、かれらがただちに人員を組織して、とり急ぎ黒い文章をでっちあげるように要求した<sup>(36)</sup>。

しかも、この姚文元の要求は、かれの勤勉な部下によって、とにもかくにも遂行された、というのである。

右に引用した古典編集室論文によると、人民日報社に配置されていた「四人組」の忠實な腹心は、その日のうちに、ある工場で労働に参加していた同紙の文藝部の編集者をひとり残らずよびもどし、姚文元の指令を傳達し、部處をさだめた、という。

それを、夜にはいつて「四人組」に報告するとともに、上海市委員會の執筆集團（おそらく「羅思鼎」のペンネームをもつ）に電話して寄稿をもとめ、電話機をおくやいなや、上海にむけて飛行機でひとをやった。——かくて、晝夜兼行で原稿が準備された、というのである。

姚文元の手紙は、かれ個人の名をもって書かれていたが、執筆者集團にとっては個人以上の意味があった。江蘇省寫作會議大批判組という署名の論文（以下、江蘇省論文と略稱）によると、上海の執筆集團の連中は、この手紙をうけると手の舞い足の踏むところを知らず、「お墨付きがきたぞ」、「これは姚文元が一手うったものだ」、「このことは政治局委員でさえも知らない」、「ほかのことはおあずけにして、これを掌握することだ」などと叫んだ。『光明日報』に配置されていた腹心は、「理解した。いまや、できるだけ急ぐことだ」とくりかえし、數日たつと、『光明日報』がまず第一發を放った。<sup>(37)</sup>

しかも姚文元は、その手紙のなかで、毛澤東のことばの「晁蓋を百八人の外に屏けた」をあらため、「宋江は晁蓋を排斥した」とした。毛澤東の意味は、『水滸傳』の作者は、それまでの物語で三十六人の猛將のなかにいた晁蓋を百八人の外に排除した」というところにあったのである。

ついで、江青は、大寨において、『水滸』の急所は、晁蓋をたなあげしたところにあります」、「いま、中央には毛主席をたなあげにしようとする人間がおります」と語った。さらに、「わたしたちは『水滸』を批判して、宋江がどのように晁蓋を排斥し、晁蓋をたなあげにしたか、みております。かれは、ああいった土豪劣紳、武將文吏を梁山におでまし願って、重要な指導的な陣地をすつかり占領してしまいました」<sup>(38)</sup>とも語った。

このころ、姚文元、江青らは、『水滸傳』の人物と現實の人物のあいだに、どのような對應を考えていたのであろうか。

江青みずから語ったのが本心であるとすれば、まず、毛澤東が晁蓋であった。毛澤東は晁蓋をたなあげしたのは、「土豪劣紳、武將文吏を梁山におでまし願って」という以上、まず文革で失脚した高級幹部の復活に盡力した周恩来であるということになる。江青のことばは、周恩來の復活政策を非難するとともに、それによって復活したひとびとを罵るものであった。四期

人民代表大會のあと、ここで決定された人大常務委員會、國務院各部の人事について、「四人組」につながるある人間は、「部長のポストは、みんなかつさらわれた。おれたちにはいくつも残っていない」と語ったという。前出の江蘇省論文はいう。

《これによってもわかるように、江青が『水滸』を批判するのはニセで、周總理を攻撃し、黨と國家の指導的幹部を攻撃し、毛主席がおこなった人事配置に反對するのが本心であった。》

ところで、宋江は熱心に盧俊義をなかにひきいれ、かれに高い地位をあたえた。宋江は「晁を屏け、盧をひっぱった」(「晁拉盧」というのが、一時期、『水滸傳』批判における論題となった。上海の「四人組」のある腹心は、中央の某指導的同志を、「あいつが『水滸』のなかの盧俊義さ」と罵ったという。周恩來の復活政策は鄧小平を復活させたことによって、最高潮にたつたといえるから、この盧俊義が誰を指すかはあきらかである。そして、鄧小平の復活は周恩來の提案があったとしても、毛澤東の同意がなくては實現しなかったであろうから、鄧小平の復活を罵ることは、毛澤東をも罵ることになる。《かくて、かれらが「宋江」をもちいて、毛主席、周總理をあてこすり、攻撃したことは、あきらかではないか。》と江蘇省論文はいう。

そこで、『水滸傳』の人物と現實の人間との對應は、つぎのような圖式になる。(これを圖式「甲」と名づける。)

〈晁蓋—毛澤東〉

〈宋江—周恩來〉

〈盧俊義—鄧小平〉

しかしながら、周恩來はすでに入院しており、國務院の總括的責任を擔っていたのは鄧小平であつたから、攻撃の主たる目標は周恩來から轉じて鄧小平へと移らざるをえなかった。そして、それはじじつ、鄧小平へと移つたのである。

鄧小平は七六年四月七日、黨中央の決議によつて一切の公職を剝奪されたが、翌日、この決議とともに發表された諸論文は、宋江批判、『水滸傳』批判のかくされた意圖が鄧小平批判にあつたことを、公然とのべた。

《『水滸』評論をつうじて、われわれはみたのである。鄧小平は資本主義の道を歩こうとすることを堅持している、プロレタリア階級をブルジョア階級に投降させようとしている、ということ。黨内の走資派は現代の投降派である。》

その根據はなにか。論文はつづけて、つぎのようにいう。

『宋江ではない』というのか？ それでは以前に宋江をもつてみずから認り、いままた復辟派をもつてみずから居るのは誰か？ はたして「投降したことはない」のか？ それでは、いったい誰が、宋江が「天に替つて道を行う」という杏黄の旗をかかげたように、「三項の指示を綱とする」という修正主義の綱領をもちだしたのか？ いったい誰が、宋江が投降派をとりいれ、指導集團を改組したように、「整頓」を名目として、毛主席の革命路線を堅持する新舊幹部を排斥し打撃をあたえ、いまいっぽうでは悔い改めようとしないう走資派をさがしだして登用したのか？ また誰が宋江が農民蜂起を侮蔑したように、文化大革命のなかで誕生した新しい事物を侮蔑、攻撃したのか？ 誰が宋江が投降したあと方臘を討伐にいったように、革命的大衆を弾壓したのか？ こうしたすべてのことは、あきらかに宋江と同じように投降活動をやったのではないのか？ しかしながらかれは「投降していない」というのだ。』

いうまでもなく、ここでのべられている批判の意圖は、このときの意圖であつて、當面の政治的要求にそぐわないほかの意圖はここではふれられていない。そしてこれを書いたのは、「四人組」に直結する執筆集團であるが、しかし、かれらはつまりるところ被指導者であつて、指導者としてこの批判運動を發動しているのではない。したがつて、これらの批判論文は、現實過程そのものとの對應でいえば、いくらか中間に密着できない部分を残している。發動者が内心にかくしもつ複雑な意圖や憎惡や感傷や自負といったものまでは、これらの論文には表現されようがないのである。

私見によれば、批判運動のなかでしきりにいわれた、「投降」とか「投降派」は、中國の公式的な説明がいうように、資本主義にたいする屈服だけを意味しているのではない。もしそうであれば、周恩來の文革調整政策、わたしのいう「脱文革」的外交政策、國內的措施は、たしかに「投降」である。また鄧小平が周恩來のあとをひきついで實施、もしくは實施しようとした措置も、たしかに「投降」である。だが、周恩來と鄧小平をともにおしなべて「投降派」と呼べるであらうか。わたしがこだわるのは、周恩來とは異つて、鄧小平が文革で失脚し、そして復活したという經歷上のちがいである。このときの鄧小平の

復活は、なるほど周恩來の發案、そして提議、といったものが大きくはたらいっていたにちがいないが、しかし、毛澤東の同意がなくては實現しなかった（だから、「四人組」は毛澤東にたいして不満をいだいた）。とすれば、毛澤東には、鄧小平にたいして、なんらかの期待があった。その期待とは、周恩來の〈脱文革〉指向を是正して〈文革〉指向へとふりもどしてくれるのではないか、という期待であつたろうと、わたしは想像するのである。

毛澤東は、文革を信じていたとおもわれる。すなわち、文革の波浪を浴び、文革のなかで改造をうけた人間は、以前とは生まれかわって労働者の、革命的、造反的、人民的、マルクスレーニン主義的、階級闘争的（等々の判定をくわえることのできる）人間になって、ふたたび活躍することができると信じていたとおもわれる。鄧小平はこのときの復活のさい、自己批判を毛澤東に提出したはずである。自己批判には形式的な文章であつたかもしれないにせよ、右のような、生まれかわりの誓いがなくてはならない。

復活した鄧小平は、七四年四月、國連資源特別總會に中國代表團團長として出席、霸權主義反對、第三世界支持の大演説をおこない、毛澤東の革命外交路線の忠實な實施者としてふるまつた。毛澤東には、期待をうらぎらない、忠實な、自己路線の執行者として、鄧小平がみえていた。そのような鄧小平を周恩來よりも（なぜなら周恩來は病氣中だったから）役に立つ人物と考え、ついには、「後繼者」であると匂わせたこともあつた。<sup>40</sup>

しかし一方、七五年の七、八、九月にわたって、鄧小平があまりにも露骨な〈脱文革〉的措施を採りはじめたのを知って、毛澤東は鄧小平は誓いをうらぎった、と感じ、失望したようである。もちろん、毛澤東の失望からのみ、鄧小平の諸措置を評價できないことはいうまでもない。その失望は中國の現實的な状況を把握していないことから生じていた。

毛澤東が、鄧小平の、いわゆる「右翼まきかえし風」の活動を知って指摘したといわれるつぎのことばには、失望とともに、それより大きな怒りのまじった感情がみられるようにおもわれる。

《あの人間は階級闘争を掌握しないやつだ。ずっとこれまで、この綱を口にしたことがない。》<sup>41</sup>



《あいつは、マルクスレーニンがわかっておらず、ブルジョア階級を代表している。「永遠にまきかえしをやりません」といつておきながら、あてにならないぞ。》<sup>(42)</sup>

右の毛澤東のことばのなかに引用されている「永遠にまきかえしをやりません」は、一九七三年四月の復活にさいして、鄧小平が誓ったことばであろう。もしくは、自己批判書のなかに書かれていたものであろう。

毛澤東が、いつ、このようなことばを吐いたかはあきらかでない。

七六年の三月ごろ、毛澤東はつぎのように語ったといわれている。

《まきかえしは人心をえない。》<sup>(43)</sup>

《社會主義革命が自分のあたまを革<sup>かく</sup>することになったぞ。協同化のときから黨内に反對する人間がいた。ブルジョアの權利を批判すると、かれらは反感をもった。社會主義革命をやりながら、ブルジョア階級がどこにいるのか、知らないのだ。共產黨内にいるのだ。黨内の資本主義の道を歩く實權派だ。走資派はいまだに歩いている。》<sup>(44)</sup>

右の、《まきかえしは人心をえない》と《走資派はいまだに歩いている》とを結合させるなら、毛澤東のこのことばは、あきらかに鄧小平を暗示している。毛澤東のことばが發せられた日付けを八カ月もくりあげて、七五年八月のものとすることはできないが、このことばが示す鄧小平にたいする不満は七五年八月にはすでに存在したとみられる。同年九月、大寨と北京でひらかれた、農業は大寨に學べ全國會議で鄧小平がおこなった報告は公表されず（江青がおこなった報告も公表されなかったが）、華國鋒の報告が公表されたところに、毛澤東の不満をみることができるともいえる。また、『水滸傳』批判のこれとの關連をみることができるともいえる。

しかし、だからといって、毛澤東は“四人組”を完全に肯定していたというのではなかった。

『水滸傳』批判のはじまる三カ月あまりまえの五月、毛澤東は中央政治局會議においてかれらに、“四人組”をつくるな、と警告し、さらにまた、“四人組”問題を解決せよ、と指示したともいわれる。七月には、“四人組”があまりにも干渉をく

わえる結果、文藝作品の創作が少ない状況について批判をくわえ、同月二十五日、映畫『創業』について「批示」を書いた。<sup>(45)</sup>

“四人組”のように、完全無缺な作品を要求し、ああでもないこうでもないと缺點ばかりつくのはまちがっている、と指摘したのである。また、江青夫人がアメリカの中國史家・ウィトケに自分の傳記を著作させようとして、あれこれと語ったことを知り、激怒したのもこのころであつた。（こうした、毛澤東の“四人組”批判が鄧小平を勇氣づけ、かれが七、八、九月の「右翼まきかえし風」を吹かせることになつたのであろう。）にもかかわらず、毛澤東は鄧小平にたいしても警戒心がはたらいっていないわけではなかつた。

そこで、姚文元は、毛澤東と鄧小平のあいだの閒隙を衝き、毛澤東がいつそう鄧小平にたいする警戒心を強め、ついに鄧小平をみかざるように期待して、『水滸傳』批判・宋江批判に着手したのだとおもわれる。

また、當時、盧俊義は葉劍英であろうという推測が海外の一部にあつた。鄧小平が“四人組”に對抗するため、葉劍英と結ぶことを畫策していたとしても、不思議ではない。

そうだとすると、『水滸傳』の人物と現實の人間との對應は、まえにあげた圖式「甲」とは若干いれかわつて、つぎのような圖式になる。（これを圖式「乙」と名づける。）

〈晁蓋—毛澤東〉

〈宋江—鄧小平〉

〈盧俊義—葉劍英〉

實際上、推進者（“四人組”、およびそれにつながる執筆者集團の指導者らがどのように對應させていたかは、まだはっきりしないところがある。公式の論文も、“四人組”逮捕のあとといえども、すべての事實を明確にしているとはいいがたい。この過程の眞相を推測するうえで有力な資料となる、江蘇省論文は、わたしが〈宋江—鄧小平〉と推測してきた記述に相當する部分を回避している。この論文には、「鄧小平」の三字は出現しない。やむなく具體的事實として言及せざるをえないばあいは、「黨と國家の指導幹部」として、鄧小平だけでなくほかの指導者をも一括してかかげる表現をとっている。それは、この論文が掲載された七七年三月には、鄧小平はまだ再復活していないからである（鄧小平の再復活は同年七月である）。

わたしは、この圖式「乙」は、前出の圖式「甲」とほとんど並行するようにして、推進者のあたまのなかに描かれていたのだとおもう。〈宋江—周恩來・鄧小平〉という枠組にしておくことは、べつに政治的効果を滅殺しないであろう。むしろ、毛澤東が、批判論文を読んで、〈宋江—周恩來・鄧小平〉という政治的映像をおもいかべることのほうが、一石二鳥の効果をあげる、と期待したかもしれない、とおもう。

かれらが期待した周恩來の失脚は實現しなかったが、七六年一月、周恩來が死去した。さらに、周恩來の追悼式で弔辭を読んだ鄧小平は、その日を最後に公式の場面に姿をみせなくなった。おそらく、毛澤東から指示がでて、一種の軟禁状態におかれたのであろう。あるいは、五七幹部學校へいつて學習せよ、といった指示であつたかもしれない。幹部學校へ出發するまでは、自宅で學習する、といったような、譴責を暗示しつつ、しかし表面上は處分をくわえるのではない措置をうけたとも考えられる。そうでなければ、四月七日の黨中央決議で、いきなり一切の公職から追放するというのでは、あまりに唐突すぎるとおもわれるのである。

國務院總理のポストが空き、鄧小平もほとんど失脚同然となった。“四人組”は色めきたつたであらう。なかでも張春橋は、毛澤東の指名を待っていたようである。七五年一月、四期人代大會で、周恩來が「政治報告」をおこない、かれが「憲法改正報告」をおこなったということからしても、順位上、かれが當然、任命をうけるべきだった。ところが、二月三日に發せられた「黨中央一九七六年第一號文件」は、華國鋒を總理代行に任命するという毛澤東の指示を傳えていた。張春橋は「一九七六年二月三日に感あり」と題する短文を書いて、憤懣をぶちまけた。(これはかれが逮捕されてから、かれの書齋で發見されたといわれる。)<sup>(46)</sup>

これからあと、『水滸傳』批判があたらしい對象にむけて展開されたのは、すでにのべたとおりである。そこで、

〈宋江—華國鋒〉

の圖式が推進者のあいだで念頭におかれるようになった(圖式「丙」と名づける)。

だが、事態の變化にともなつて、「四人組」は、上層の指導幹部ばかりでなく、各層の幹部に走資派がいると指摘し、「どの層でも走資派をつつきだせ」と煽動し、『水滸傳』批判もこれに呼應して、「どの層でも生きた宋江をつつきだせ」と叫ぶようになった。

「投降」、「投降派」にもあたらしい意味がくわつた。〈脱文革〉以後、軌道にのりはじめた、外國との貿易、外國からの先進的技術の導入は「投降」ということになった。また、〈脱文革〉以後の、〈脱文革〉的な政策や措置を執行する人間、さらには「四人組」に服従しない人間が「投降派」ということになった。江蘇省では、「四人組」の手先が、「屠宋」という假名を名のり、公然と省委員會の主要な責任者を「宋江」と呼んだ。虐殺をくわえるぞと恫喝したわけである。<sup>(47)</sup> そうなると、つぎの圖式が存在したことになる。

〈宋江—反“四人組”—〉

しかし、ここまでくると、もはや圖式というようなものではなく、人爲的につくりだされた社會的雰圍氣、社會的不安に乘じ、またそれをいっそう煽動する、罵語、流言蜚語といったものでしかないことになる。だがこのように、「宋江」という罵語が現實性をもつにいたったほど、それほど『水滸傳』批判は猛烈であつたわけである。

#### 四 毛澤東と『水滸傳』

毛澤東の眞意は、はたしてどのようなところにあつたのだろうか。七五年八月のかれの發言は、いくらか意外な感がなくもない。かれは從來、中國の古典にたいしては、總體的に肯定的であり、好意的であつた。

たとえば、『毛澤東選集』のなかで、かれが『水滸傳』に言及し、『水滸傳』から事例をひいている箇所をみても、いちおうは、この古典小説を肯定的に評價しているようにみられる。

一九三六年十二月の「中國革命戰爭の戰略問題」、三七年八月の「矛盾論」、四九年六月の「人民民主專政を論ず」、いずれも『水滸傳』をわざわざあげつらっているわけではないが、しかし、有益な事例を『水滸傳』に發見しているのである。

「中國革命戰爭の戰略問題」では、「戰略的退却」を論じるさい、劣勢におかれた軍隊がとるべき計畫的な段取りである、といつて、『水滸傳』第九回の柴進の邸で柴家の武術指南・洪教頭をうち破つた林冲が、まずうしろに退いた例をあげている。

《誰でも知っているところであるが、ふたりの武藝者が睨みあつたばあい、聰明な武藝者はよくうしろへ一歩ひくが、愚か者はその勢い天を衝かんばかり、最初に自分の腕をすっかりさらけだすので、ついには、うしろへひいた人間によってうち倒されることがよくある。

『水滸傳』のなかの洪教頭は、柴進の家で林冲を負かそうとして、つづげざま「やるぞ、やるぞ、やるぞ」と叫んだが、ついにはうしろにひいた林冲が、洪教頭の隙をみいだして、パツと蹴とばしたので、洪教頭はひっくりかえつた。<sup>(48)</sup>》

「矛盾論」では、『水滸傳』四十七回から五十回にかけて、宋江が祝家莊を攻める話があるのを、例にひいている。祝家莊はかねて梁山泊と對立しており、宋江の部下を捕えたこともあつて、宋江が討伐にむかい、二度、攻撃をくわえて二度とも失敗した。盤陀路（迷路）がとりまいていたからである。のちに、孫立をもぐりこませ、かれに内部から氣脈をつうじさせて、ついに勝利した（晁蓋はこの戦いに参加せず梁山泊に残った）。

『水滸傳』のなかで、宋江は三たび祝家莊を打ち、二回は情況がわからず方法もまちがっていたので負けた。のちに方法を改め、情勢を調査することから着手した。かくて、盤陀路をくわしく知り、李家莊、扈家莊と祝家莊の聯盟を解體し、かつ外國の物語にてくる木馬の計略によく似た方法を用いて、敵の陣營のなかにひそむ伏兵を配置、第三回めには勝つた。『水滸傳』には多くの唯物辨證法の事例があるが、この三たび祝家莊を打つは、もつともよい例の一つである。<sup>(49)</sup>》

「人民民主專政を論ず」では、中國共產黨の對外政策について、「諸君はあまりに刺激しすぎるぞ」という批判があるのに答えて、中國共產黨は、對處しようとしている相手のなかでは、帝國主義者とその走狗にたいしてのみ、強硬に對處するの

だ、野獸のまえでは、いささかも怯えをみせてはならない、として、『水滸傳』第二十三回にみえる武松の武勇傳を例にひいている。武松は景陽岡で人喰い虎を殴り殺すのであるが、そのときのかれは、岡のふもとの居酒屋で強烈な酒をあわせて十八碗も飲んだあとであった。

《われわれは景陽岡における武松に學ばなければならない。武松からみれば、景陽岡の虎は、それを刺激してもああであつたろうし、刺激しなくてもああであつたろう。どのみち人を喰うのだ。虎を殴り殺すか、虎に喰われるか、どちらかしかないのである。》<sup>(50)</sup>

以上の事例をあげる毛澤東の論調から、かれが『水滸傳』を反面教材として認識していた痕跡を發見するのはむずかしいように、おもわれる。あるいは、かれは『水滸傳』は全體的には反面教材であるが、部分的には正面から學ぶに値する教材である、と考へていたかもしれない。『水滸傳』のあらゆる部分をすべて肯定していたということは、ありえないであらう。

しかし、かりに『水滸傳』についてはそうだとしても、かれは以前には、その主人公、宋江にたいして言及するさいには肯定的であつた。

一九三九年十二月の「中國革命と中國共產黨」という教科書的な著作のなかで、かれは宋江を多くの農民蜂起、農民戰爭の指導者のなかにいれている。毛澤東によれば、それらの農民蜂起、農民戰爭は、農民階級と地主階級の矛盾が主要矛盾である封建社會において、歴史を發展させる原動力であつたというのであるから、このとき宋江は投降派としての側面は、毛澤東によつて不問に付されていたということになる。投降した宋江よりも、蜂起を指導した宋江をみるべきだ、という主張もこめて、このような言及にしたとも考えられる。

《封建社會の主要矛盾は、農民階級と地主階級の矛盾である。

このような社會においては、農民と手工業労働者が財富を創造し、文化を創造する基本的階級であつた。

地主階級の農民にたいする殘酷な經濟的搾取と政治的壓迫によつて、農民は數多く蜂起をおこない、地主階級の支配に

反抗するようおいこまれた。秦朝の陳勝、吳廣、項羽、劉邦にはじまって、なかごろ漢朝の新市、平林、赤眉、銅馬、および黃巾、隋朝の李密、竇建德、唐朝の王仙芝、黃巢、宋朝の宋江、方臘、元朝の朱元璋、明朝の李自成をへて清朝の太平天國にいたる、總計大小數百回の蜂起はすべて農民の反抗運動であり、すべて農民の革命戦争である。中國の歴史における農民蜂起と農民戦争の規模が大きいことは、世界史上まれにしかみられないものである。中國の封建社會においては、このような農民の階級闘争、農民の蜂起、および農民の戦争だけが、歴史發展の眞の動力であつた。<sup>(31)</sup>》

このような歴史觀にたつ以上、毛澤東が宋江は投降派であるなどと非難しようとは、誰にも豫測できなかったのである。

毛澤東のこうした言及の論旨と論調は、これ以後、中國において『水滸』を評價するさいの基調になつたが、しかし、じつさいに『水滸傳』を読み、これを論評しようとして、人びとは苦しんだであろう。『水滸傳』においては、宋江は徽宗皇帝の招安をうけいれ（むしろ、自分から待ち望み、申出をおこない）、そのあと、自分たちと同様な農民側である方臘討伐に参加し、功績をたてている。

そこで考えられたのが、『水滸傳』を前半と後半に分け、前半だけを出版する方法である。さいわいこれは前例のないことではなく、明末清初のひと・金聖歎が、百回本、あるいは百二十回本（主として百二十回本）を底本として、七十二回以後の部分を引きすて刊行したことがある。それで、この金聖歎本を底本として、北京・作家出版社から新しい版の『水滸傳』が出版された。わたしの手もとにある五三年十二月の第二版の巻頭には「出版説明」と「本書の作者にかんして」と題する、作家出版社編集部署名の短文が付されている。（第一版は未見のため、第一版と第二版の相異はあきらからでない。以下作家版と略稱するのは、この第二版である。これの奥付けには「一九五二年十月人民文學出版社第一版」と記されている。）

作家版の『水滸』（著者を施耐菴、書名を『水滸』とする）は、金聖歎本を「底本として慎重に校訂をくわえて重印する」と、その「出版説明」でのとおり、金聖歎が獨自の見地からくわえた批評は削除し、原文の變改もしかるべくもとにもどしている。しかし、なぜ、七十二回以後を引きすてなのか、引きすてなければならぬか、については積極的な主張も提案も

ない。ただ、金聖歎本のすぐれた點をつぎのようにあげるだけである。

《そのすぐれた點は、第一に、すでに『水滸』の菁華と主要部分を含んでおり、第二に、文字上もほかの版本に比べて洗練され統一されている。廣汎な一般讀者にとって、比較的に適している。》

なぜ、七十二回以後をきりすてるのか、について明確にのべたのは、文藝評論家で、當時、『文藝報』の編集長でもあった、馮雪峯である。かれは一九五四年、『文藝報』に、『水滸傳』について長編の評論を連載し、さまざまな角度から議論を展開したが、そのなかで、いまここでとりあげている『水滸傳』後半きりすての問題にみあう見解をのべている。その部分を要約して、つぎにかかげる（番號は引用者が付したものだ。かれは、『水滸傳』といわず、『水滸』という）。

《（1）『水滸』の根本的な内容は農民蜂起を描くことであって、招安をうけいれたのは、根本から派生したものすぎない。したがって、肯定的に農民蜂起をとりあげた前半が重要である。（2）後半は、農民蜂起が彈壓されて敗北したのち

の狀況を不正確に反映したものであるが、やはり農民蜂起のテーマの範圍内に含まれる。招安をうけいれて歸順したとしても、すべての歸順を革命にたいする裏切りと考えることはできない。それは歴史的な現象であり、複雑な情勢から生まれたものである。（3）しかしながら、『水滸』の後半は、藝術的にやや劣り、リアリズムの精神からいって、前半ほど

高いものでつらぬかれていない。また、後半で、田虎、王慶、方臘といった農民蜂起に否定的な態度をとっているのも前半と一致しない。そうした過程であられる宋江たちの性格も、前半と一致しない。（4）したがって、前半と後半の作

者は異なる人物である。『水滸』の作者は一人だけではなかったが、主要な作者、偉大な作品にしあげたひとはいたであろう。施耐菴をこの主要な作者のペンネームと考えてよいであろう。》<sup>(52)</sup>

馮雪峯は、一九五三年秋におこなわれた『水滸傳』についての學習會に參し、討論に參加している。このときすでに、人民文學出版社から『水滸』が出版されていた（これの第二版が、わたしのいう作家版である）から、なぜ後半をきりすてたのか、質問もでたであろうし、議論もあったであろう。馮雪峯は、この討論のさい提起された質問にたいする回答というかたちで、



この長篇の評論をまとめ、題を『『水滸』にかんするいくつかの問題に答えて』としたのである。馮雪峯が、質問を提起する立場になく、答える立場にあったのは、かれが人民文學出版社の副社長であったからでもある。引用した部分は、作家版『水滸』が、なぜ後半をきりすてたかについての説明であるとともに、主張でもあった。

だが、馮雪峯が、右の引用（2）でものべているように、招安をうけいれた歸順したとしても、それもまた農民蜂起のテーマの範圍に含まれるのであれば、後半をきりすてない版本も出版されてよいはずである。一九五四年三月、北京・人民文學出版社が百二十回本の『水滸全傳』を出版したのも、そのような趣旨があつたのであろう。しかしこれは、一種の學術的出版であつた。

馮雪峯のこの意見は、毛澤東の當時の肯定的評價と作品そのものの否定面の矛盾を調和させることができたばかりでなく、文藝批評として出色のものであるが、それは同時に、作家版の出版という措置をともなっていた。すなわち、批評と行政の結節點に位置するものであつた。それは古典小説が、「文化遺産」としては國家によって管理され、「書物」としては讀者に私的に愛好されるという二面性をもっているのと對應する。個人の私的な讀書にたいして、國家は啓蒙と教育を滲透させようとしているのである。この啓蒙と教育の責任から免除されるなら、『水滸傳』の前半のみの出版という事態は發生しなかつたであらう。へ七十二回以後をきりすてゝは、微妙にへ七十二回以後をきりすてなければならぬと結合しているのである。

まえに要約した馮雪峯の意見の（1）（2）（3）はひとつながりのものであるが、啓蒙と教育の立場からは（2）を強硬に主張せず、したがつて後半をきりすてたわけであるが、しかし、（2）を強硬に主張しなかつたのは、馮雪峯の意見が、不徹底なものであつた（不徹底なものにならざるをえなかつた）ことにもなる。

馮雪峯は、その評論のなかで、古い傳統的な『水滸傳』觀を紹介している。古い傳統的な『水滸傳』觀というのは、馮雪峯によればつぎのように要約できる。

《宋江たち英雄好漢は、がんらい忠臣義士であつたが、「貪官汚吏」に苦しめられて、やむなく「身をおとした」。しかし

宋江は、身は梁山泊にあつても心は朝廷にあり、皇帝が左右の姦臣にあざむかれたまわぬよう、そして、はやく「詔書をいただいて歸順」させてもらい、國のために盡せるよう、つねに希望していた。だからこそ、かれらは梁山泊に集つて勢力が強大になつたにもかかわらず、「帝王を稱」さなかつた。かれらが、「大宋皇帝」の位をうばおうとしなかつた點は、歴史上の他の「謀叛」ものたちと、まったくちがつている。のちに「歸順」してからは、たえず「忠義」をあらわした。最後に朝廷の姦臣たちが宋江に毒酒をのませたが、死をみることに歸するがごとく、さらに「謀叛」氣の多い李達も道ずれにした。このように『水滸』は感動的な忠臣義士を書いたものである。<sup>53)</sup>『

こうした古い傳統的な『水滸傳』觀は、最後の〈それゆえに感動的な忠臣義士〉という結論部分をへそれゆえに唾棄すべき「忠臣義士」〈とおきかえることによつて、新しい中國でふたたび息をふきかえた。そのおきかえられた論理にいくらか遠慮して、馮雪峯はその論點(2)を強く主張しなかつたのではないだろうか。

もちろん、馮雪峯は、右のような古い傳統的な『水滸傳』觀に賛成してはいない。右の引用につづいて、かれは、〈この見方は根本的にまちがつている。〉といい、さらにつぎのようにいう。

〈このような見方にたつかぎり、『水滸』は「忠臣」と「姦臣」のあいだの矛盾をもとに書かれたことになり、梁山泊の階級闘争としての意義、宋江たちの革命者、「謀叛」ものとしての意義はなくなる。〉

この馮雪峯の意見は正しい。すなわち、一九七五年八月の毛澤東のことばは、まったく馮雪峯が紹介している古い傳統的な見方を踏襲している。馮雪峯が、つぎのようにいつているのも、毛澤東のことばの文脈に對應する。

〈こうした古い傳統的な見方にたつと、歸順問題は全書をつらぬく一本の糸となり、後半が前半より重要となる。〉  
まさしく、そのとおりである。毛澤東も、この書物は「絶妙であるが、どこが絶妙かといえは投降するところだ」といつている。

馮雪峯は、かれがいう古い傳統的な見方にたいして、進歩的・階級的な見方を提出した。毛澤東の見方は、馮雪峯より、さ

らに鬭争的・階級的であつたが、それは馮雪峯が否定し、反對した、古い傳統的な見方にたちかえることであつた。ただし、古い傳統的な見方では「感動的な忠臣義士」とされた人物を「唾棄すべき」「忠臣義士」に逆轉させたいことであるが、しかし、その點を除外すれば、『水滸傳』にたいする評價は、古い傳統的な見方そのままである。

馮雪峯は、この見解のゆえに批判されるということはなかつたが、この評論を發表した翌年、『文藝報』編集長の職を追われ、以後は評論活動はもとより公式の場から姿を消した。『水滸傳』學習は政治運動化しなかつたが、このあと『紅樓夢』をめぐる批判運動がはじまり、そのきっかけとなった無名の青年の投稿を『文藝報』が冷淡に扱った責任を問われたものである。『文藝報』は、はじめは掲載を拒否し、ついで掲載したが、そのさい編集部として、その論文に全面的に賛成でない旨の前言を付したのであつた。その前言が、馮雪峯の執筆であつたか否かはあきらかではないが、かれの「ブルジョアの旦那さま的作風」が、『紅樓夢』批判運動のなかで非難的のとなつた。その非難のなかには、『水滸傳』學習のさい、かれが唯我獨尊的にふるまい、尊大であつたという指摘もあつた。批判者の誇張があつたにせよ、他人の眼にそのように映じたほど、かれは自信滿滿、『水滸』に坎んするいくつかの問題に答え「たのであらう。あたるべからざる勢いであつたというから、その評論と結合して作家版を出版した、その後半きりすての措置が得意でさえあつたのかもしれない。

一九七五年の毛澤東のことばは、そのとき突如としてかれがおもいついたものではないと考えてよいであらう。毛澤東の『水滸傳』にたいする見方は、古い傳統的な見方と共通するものであるから、むしろ常識的とさえ、いえる。毛澤東は、自分が『選集』にいた論文で示した見解を肯定し、溫存しつつも、しかし、馮雪峯の見解と措置にはいくらかの不満を感じたのかもしれない。『紅樓夢』研究批判は、やがて胡風にたいする批判、丁玲にたいする批判をも發生させるが、馮雪峯がうけた處分は、胡風、丁玲に比較してもみおとりしないほど、嚴格なものであつた。

馮雪峯にたいする非難には、丁玲と小集團をつくつて、『文藝報』を獨立王國のようにしたことも含まれており、丁玲が追放されて公式の場から姿を消した以上、かれも同様な處分をうけざるをえなかつたこととおもわれる。しかし、いまからふり

かえって考えると、『紅樓夢』研究批判が発生せず、丁玲批判が発生しなかったとしても、あるいは馮雪峯の『水滸傳』評論だけを單獨にとりあげた批判運動が発生したのではないかと、おもわれる。<sup>(54)</sup>

『水滸傳』批判運動を概観し、さらに以前の議論の展開をふりかえるとき、現代中國における古典小説（ひとり古典小説のみならず、ひろく古典一般、文學藝術一般でもある）の讀み方、讀まれ方には、するどく政治的な要素がはいりこみ、この政治的な要素が主要なほとんど決定的な役割を演じていることに氣がつく。

作中人物をどのように評價するか、その作中人物を描いた作品をどのように評價するか、は、評價する人間の、新しい國家にたいする、マルクス主義にたいする、社會主義にたいする、指導政黨にたいする、革命にたいする、革命の擔い手である労働者・農民・兵士にたいする、階級闘争史觀にたいする、忠誠、理解、認識、共鳴の性質と程度をあらわすもの、とされたのである。いくつかの批判運動が、そのような〈され方〉を浸透させ、當然視させていった。それはまた、文藝上の批判を政治上の批判に轉化させることをあやしまない社會的風潮をもたらし、その社會的風潮に乗じて、ひとつの大衆操作の政治的技術として意識的に利用する政治的作風を固定化することになった。

注

一 批判の概略

(1) 『水滸傳』・宋江批判の政治的な意圖について、わたしは當時、一九七五年十一月に執筆した文章で、『水滸傳』批判が展開されたばかりの論文を讀んで反射的におもいうかべたのは、鄧小平が批判の對象になっている、ということだったとのべ、一九七五年九月の〈農業は大衆に學べ全國會議〉前後における中國の狀況と對照させたことがあった。わたしは、そこで、『これは、もともと、〈脱文革〉のうごきにたいする反指定としてはじまった。』とのべた。

(2) 『水滸傳』批判の現代的意義、拙著『同時代としての中國』田

畑書店七六年四月、所收参照)

朱洪「舞臺上の宋江にしかるべき地位をあたえよ」『光明日報』七八年十月七日によると、傳統的な演目が復活したのはよいが、改編された「三たび祝家莊を打つ」にはまるで宋江が登場せず、代って晁蓋があらわれるから、觀客は興味索然、議論百出、うけいれがたいと語っている、という。元曲には晁蓋が祝家莊を打つものがあるが、これは『水滸傳』が書物にまとめられる以前のものであって、『水滸傳』を改編したのではない、したがって現代人が、あたらしく晁蓋が祝家莊を打つ脚本を創作してもよいが、しかしそれと京劇を改編することは、まったくべつのことである、という。朱洪論

文の表題原文は「給舞臺上の宋江に應有的地位」。

(3) 新中國の成立後、毛澤東が發動展開した文藝批判については、拙著

『現代中國の文學 展開と論理』研究社 一九七二年二月、参照。

(4) 解放軍論文の原題は「『水滸』是一部宣傳投降主義的の反面教材。す

ぐつづいて、本文で言及されている梁效論文の標題原文は「魯迅評

『水滸』評得好——讀『流氓的變遷』」。

(5) 知識青年とは高級中學卒業の學歷をもつものをいうが、かれがいわ

ゆる「下放」知識青年、すなわち都市で生まれ育って進學し、卒業

後に農村にはいったのでなく、もともと農村出身者であることは、

その署名のまゝに付された、「山東利津縣同鄉知識青年」の「同郷」

の二字によって知ることができる。趙安亭論文の原題は、「叛徒的

頌歌」。

(6) 南開大學論文の表題原文は、「『水滸』の思想和藝術」。本文のあと

に記した、自己批判ともいべき鍾谷論文の題は、「『水滸傳』の路

線闘争から歴史の經驗を吸收する」(原題は「從『水滸傳』の路線

闘争中吸取歷史的經驗」)『南開大學學報』一九七四年第二期——こ

のころの學報は日本にはいつておらず、未見である。また、『紅旗』

九期掲載の鍾谷論文表題の原文は、「評『水滸』的投降主義路線」。

この「鍾谷」というペンネームは、中國古典文學教研室の「中」と

「古」の同音字をあてたものであろう。

『紅旗』一九七五年九期(八月二十八日出版)に掲載された『水滸

傳』批判の論文は、つぎのとおりである。——(1)「魯迅『水滸』

を論ず」(2)「短評『水滸』にたいする評論を重視せよ」(3)

方岩梁「人民にもれなく投降派だと知らせるがい——魯迅の『水

滸』にたいする論述を學習する」(4)北京大學、清華大學大批判

組「投降主義を宣揚したの反面教材——『水滸』を評す」(5)鍾谷

組「『水滸』の投降主義路線を評す」(6)山東利津縣同鄉知識青年

趙安亭「叛徒的頌歌」。以上の論文表題の原文は、つぎのとおりであ

る。(1)「魯迅論『水滸』」(2)「短評、重視對『水滸』的評論」

(3)「使人民都知道投降派——學習魯迅對『水滸』的論述」(4)

「一部宣傳投降主義的の反面教材——評『水滸』」(5)「評『水滸』

的投降主義路線」(6)「叛徒的頌歌」。

魯迅のことばのうち、『水滸傳』を批判する側に都合のわるい箇所

は、『紅旗』が引用したすぐまゝにみられる。すなわち、

『李逵が處刑場を荒しまわったとき、マサカリをふりまわし、

先頭にたつて首を斬りまくったが、しかし斬られたのは見物の

衆だった。』

趙安亭の論文では、李逵を宋江の投降路線に反對した革命派とし

ている。その革命派が、見物の衆、すなわち、民衆を殺したとい

うではないかにも不都合であらう。

その都合のよい部分、すなわち引用者が喜んで引用した部分も、

これは宋江についてだけだったのだとする解釋がある(張子「『水

滸』の人物は政府に反抗する——魯迅はどのように『水滸』を評し

たか」)『中華文史論叢』第八輯、上海古籍出版社、一九七八年十

月)が、そうともいえるし、そうともいえない。「つまるところは、

奴隸であった」という「奴隸」のなかには、當然のことながら李逵

が含まれているとしなければならぬ。

そもそも、ある文章を、何十年も経過した現代社會に適用しよう

というところに無理がある。政治運動のスローガンや自然改造の計

畫なら、あるいは適用できるかもしれないが、當時の特定の人物、

特定の状況に觸發されて感慨をのべ、その感慨のおもむくままある

文學作品を論じたことばをとってきて、ある政治的意圖をこめた文

藝批評に役立てようとしても、それは無理というよりも、ほとんど

不可能なことであらう。かりに、魯迅の『水滸傳』についての論評

が、完全に現在の政治的意圖に適用できるものだととしても(すなわ

ち、都合のわるい部分、引用をはばかる部分がないとしても)、し

かし、だからといって、魯迅が批判運動を發動すべきだ、發動しな

ければ文藝批評として不徹底だと考えていたとは、とうていおもわ

れない。かれの資質、かれの文學的發想は、多數の人間が集ってど  
つと聞の聲をあげることに嫌惡をおぼえる性質であつたとおもわれ  
る。まして、多數の人間を集めて、聞の聲をあげさせる人間にたい  
しては、本能的といつてもいいほど、そりがあわなかつた。魯迅の  
文章は、要所要所に、格言にもなる名句がちりばめてあつて、ひと  
びとが引用しやすいものであるが、だからといって引用しやすい箇  
所を引用することに慣れるなら、それはかえつて魯迅から遠ざかっ  
ていくことになる。

魯迅がその著作や手紙のなかで、『水滸傳』に言及した箇所は三  
十餘箇所へのぼる（前出、張手）。そのなかから一箇所だけを借用  
するというのは、魯迅の名聲だけを利用した行爲だときめつけられ  
てもしかたがない。

(9) 人民日報社説の表題原文は、「開展對『水滸』的評論」。

(10) 手もとにある小冊子をあげると、(1)『『水滸』にたいする評論  
を展開せよ』(一)(二)三聯書店香港分店、一九七五年九月十一日

(2)『投降派宋江を評す』廣東人民出版社 七五年十一月 (3)北  
京大學中文系 開衆『反面教材』『水滸』人民出版社 七五年十二  
月 (4)陸磊『投降派宋江評析・少年讀者と『水滸』を語る』上海  
人民出版社 七六年三月、ポスターとしては、(5)任梅編、聯合創  
作組繪『人民にもれなく投降派だと知らせるがいい』人民美術出版  
社 七五年十月、などがある。上記のうち(2)は、『福建日報』、  
『南方日報』、『廣州日報』などに掲載された論文まで収録している。  
同様に、いくつかの地方出版社が、地方色をおりこんだ小冊子  
を出版しているとおもわれる。(5)は日本語版雑誌『人民中國』  
七六年二、三、四月號に「繪ものがたり 投降派・宋江の正體」と  
題して、開衆『水滸傳』とその中心人物宋江を評す」とともに連  
載されている。(1)の(一)は黃俊東氏、(5)は勝村哲也氏の好意  
によって入手した。記して感謝する。

(11) 一九七六年四月八日の『人民日報』第三面を埋めた論文は、つぎの

『水滸傳』批判について

四篇である。(1)北京第二棉紡廠労働者理論組「走資派は、人民

がもれなく投降派だと知ることをもっとも恐れる」(2)北京市東  
昇公社塔院大隊黨總支部「われわれは投降派を批判する」(3)北  
京衛戍區某部六中隊理論小組「鄧小平の眼かくし法を暴く」(4)  
東方焰「革命的大衆運動のまえに」。論文表題の原文は(1)「走  
資派最怖人民都知道投降派」(2)「我們就是要批投降派」(3)  
「揭穿鄧小平的遮眼法」(4)「在革命群眾運動的面前」。

なお本文のあとにみえる、清華大學構内の壁新聞の状況について  
は、たとえば、『朝日新聞』七六年二月二十一日、北京二十日田  
所特派員發の記事、などを参照。

(12) 批林批孔系列の論文は、北京大學・清華大學大批判組「孔丘そのひ  
とを再論す」、『水滸傳』批判系列の論文は、高路「宋江ひとたび山  
にのぼれば……」。表題原文は、それぞれ「再論孔丘其人」、「宋江  
一上山、就……」。

(13) 「北京政變——推理・その不透明な部分」、北京「一九七六年十月」  
二十三日・伊藤(正)特派員共同電『京都新聞』同二十四日。

二 批判の論點

(14) この引用は後出の『四つの古典小説の評論』六四ページから。引用  
文中の引用は毛澤東の『延安文藝座談會における講話』のなかから。

(15) この引用も同上、六四ページ。

(16) この引用も同上、三六ページ。

(17) この引用も、三六～三七ページ、同上、すぐまえの引用につづく  
文章である。

(18) 同上、三六ページ。

(19) 同上、四二ページ。

(20) 同上、四二～四三ページ。

(21) 同上、四三ページ。なぜ、ここで、獨自の天分があつたのでないこ  
とを力説しているかといえ、それは林彪が失脚したさいに展開さ  
れた「天才論」批判を踏襲しているのである。林彪は毛澤東を天才

としてもちあげたが、毛澤東は林彪が失脚すると、それはけっきょく林彪自身の權威をたかめるためであったと批判した。この引用は、要約ではなく、逐字譯であるが、この箇所は、井岡山にたてこもった毛澤東をそれとなく暗示している。

宋江は梁山泊にのぼるのにさいて優柔不斷であった。農民蜂起の指導者らしくないのである。そこで、宋江をどのように評價するか、評論家はあたたまを悩ませたであろう（かれが農民蜂起の指導者である以上、賞讃しなければならぬから）。そして、論旨を優柔不斷なありさまをのべることから「天才論」批判へとつなぐことができたとき、評論家は、自分で自分のおもいつきに満足したのではないだろうか。たしかに、優柔不斷↓（自分で時代をきりひらいたのではない）↓時代の波にまきこまれ、そして政治の舞臺にあがった人間↓「獨自の天分」をもたない↓「天才論」批判と結びつく↓毛澤東・井崗山の暗示……、というように論旨はなめらかにつづく。だが、宋江は、本文のつづきでのべたように、農民蜂起の闘士として一貫したのでないから、宋江＝毛澤東、というふうにして論文を終らせることはできないのである。

(22) 後出『四つの古典小説の評論』四四ページ。

(23) 注(9)参照。

(24) 『紅旗』一九七五年九期、二六ページ。

(25) 同上、三〇ページ。

(26) 同上、三二ページ。

(27) 三 批判と現實過程

人民文學出版社古典文學編集室 人民日報文藝部「『水滸』を批判する運動」は、そもそものんであったか『人民日報』一九七八年八月十一日。論文題目の原文は、「評『水滸』運動」到底是怎么回事？」。

(28) 蘆荻の回想は、「毛主席のかたわらにありて讀書す——北京大學中文系講師蘆荻を訪ねて」(在毛主席身邊讀書——訪北京大學中文系

講師蘆荻)『光明日報』七八年十二月二十九日。この文章の末尾に記された署名は、新華社記者 楊建業。

(29) 小冊子の書名原文は、『四部古典小説評論』。收録されている評論は、南開大學論文のほかは、何磊「三國演義」を評す、上海師範大學中文系西遊記を論ず著作小組「西遊記」を論ず、李希凡「曹雪芹と『紅樓夢』」。

(30) 七二年二月十四日、北京・AFP時事電。『サンケイ新聞』二月十五日掲載。

(31) 同十四日、北京・共同電。『朝日新聞』二月十五日掲載。

(32) 一九五二年十月第一版の『水滸傳』(書名は『水滸』)については、本文、四でふれるが、これを北京・人民文學出版社が、第二版を五三年十二月、北京・作家出版社が出版した。この上製本は一冊本である。並製が上下二冊の分冊だったのである。わたしが作家版と呼ぶのは、第二版が手もとにあることによる。

(33) 周恩來は一九一三年八月に南開中學に入學、一七年六月二十六日に卒業した。在學中は、學業が優秀で頭角をあらわしたばかりでなく、『校風』という週刊の雑誌の編集に参加するとともに、評論も執筆した。南開大學が成立したのは、一九一九年九月のことであるが、『校風』は一時、南開大學と南開中學が合同で出版し、これにも周恩來は評論を執筆した。周恩來は、一九一七年九月から一九一九年四月までの一年半、日本に在任し、マルクス主義に接觸した。『五四』愛國運動のたかまりに刺激されて歸國し、七月には『天津學生聯合會報』を編集出版、評論を執筆した。九月には覺悟社を設立、五四運動の指導的中核となった。また、南開大學文科に入學した。

翌二〇年一月、千餘人をひきいて請願運動をおこない逮捕され、七月によくややく釋放になった。十一月、上海でフランス船に乗船、約四百餘名とともに、『勤工儉學』の地、フランスにおもむいた。——以上は魏宏運「周恩來同志『五四』時期革命活動紀要」、廖永武「周恩來同志と南開の『校風』」『南開大學學報』七九年一期、一月十六

日出版、によって記した。以上のほか、拙譯司馬長風『周恩來評傳』太平出版社、一九七五年十二月刊（原著は嚴靜文のペンネームで波文書局、七四年三月刊）によっても、南開中學・大學と周恩來の因縁を知ることができる。周恩來は、中國に歸國する直前の一カ月京都に在住したと、一九七一年一月に、日本からの代表團に語っているが、筆者（竹内）の調査によれば、周恩來は一九一八年十月から一九四年四月までの七カ月間、京都に在住したという證言がある。

文革以後、最初に印刷されたものを確定することは困難であるが、目下のところ人民文學出版社、一九七二年四月第一〇次印刷のものをあげてよいであろう。本文中にすでに引用したように、同年二月、文革いらいひさびさに古典小説が書店で賣りだされたが、そのときは十年まえに印刷された在庫品だったからである。ついで印刷されたのが、人民文學出版社、七三年十一月第一次印刷と記されたものである。第一〇次印刷本も、第一次印刷本も巻頭に「再版説明」を付すが、署名はいずれも「人民文學出版社」、日付は前者は「一九七二年三月」、後者は「七四年五月」である。前者の日付は出版より一カ月まえであって問題はないが、後者の日付は、出版の日付より半年もあとの「七四年五月」で、不審である。

おそらくこの第一次印刷本は、小説の本文の部分が印刷をおわったあと、『水滸傳』にたいする新しい評價が生じたので、第一〇次印刷本の「再版説明」をそのまま生かすことができなくなり、新しく書きあらためたものの、そのために時間がかり、この本には、二つの日付けが共存することになったのである。したがって、この第一次印刷本がじっさいに書店にでたのは、七四年五月よりあとだったとおもわれる。

しかし、こうも考えられる。この第一次印刷本はつつがなく印刷製本をおわって、七三年十一月からしばらくあと、七三年の年内には書店にならんだ。その「再版説明」は第一〇次印刷本と同一で

『水滸傳』批判について

あった。ところがこれが賣切れないうちに、新しい評價が生じた。それで書店から回収したもののや在庫していたものの「再版説明」をハサミできりと、新しい「再版説明」にとりかえたのだ、と。そうだとすると、この第一次印刷の『水滸』には、七四年五月の「再版説明」のほかに、七三年十一月以前——七二年三月、あるいは七三年十月——の日付けをもった「再版説明」つきのものが、どこかにあるにちがいないということになる。それでは、七三年十一月から七四年五月までの約半年間に生じた、新しい評價とはなにかといえ、それは本文、一でのべた趙安亭論文が提起したもの以外に考えられない。

じじつ、第一〇次印刷本の「再版説明」は、『水滸傳』には、『鮮明な革命性と深厚な民主性がある』とのべているが、第一次印刷本ではこの表現はみられない。前者は『水滸傳』には忠孝節義などのお説教、婦人にたいする蔑視、宋江を軟弱に描くなどの、封建性に屬する表現があることを指摘しているが、明、清にわたってひろまったさいの《もっとも主要な社會的役割は、搾取され壓迫された、廣汎な勤勞大衆が、たちあがって封建地主階級にたいし造反することを鼓舞した》とのべ、總じて肯定的である。これにたいして後者は下層人民と蜂起者が小説の主人公であって、かれらが武裝闘争した歴史的眞實が反映されているとみとめつつも、『しかしながら、われわれが必ずみなければならぬのは、『水滸』に描かれている農民蜂起は、ただ惡徳官吏に反するだけで皇帝には反せず、最後には「招安」をうけたということである』と指摘、『投降主義路線を美化しているのであって、この面で見みだしたきわめて有害な社會的影響にたいしては眞剣に批判をくわえなければならぬ』と、きわめて鋭く批判している。

さらに、第一次印刷本と稱するものも出現している。香港、三聯書店「水滸」にたいする評論を展開せよ（二）收録の、「人民文學出版社一九七五年重印『水滸』の前言」の末尾に、「北京人民



文學出版社一九七五年九月第三版第二二次印刷『水滸』と註記されている。しかし、これはじつは一百回本の「前言」であって、この一百回本は、この註のあとにのべる新しい版である。なぜ、このような註記を付したのか、理解に苦しむ。

また以上とは別箇に、『水滸傳』の新しい版が刊行されている。人民文學出版社、七五年十月、北京第一版、第一次印刷、上中下全三冊、横組み。巻頭、扉のまえの頁には、『水滸』を論評した毛澤東のことばが、『毛主席語録』としてかかげられ、扉のつぎの頁には、魯迅の、これも『水滸傳』を論じたことばがかかげられている。「前言」の署名は人民文學出版社編集部、日付けは七五年九月である。これは、一百回本（明萬曆本の『李卓吾先生批評忠義水滸傳』を底本としている。すなわち、『投降派』宋江の眞面目をあきらかにし、『反面教材』として讀むために出版されたものである。

したがって、七三年十一月第一次印刷本は、五二年十月に第一版をだした『水滸』（わたしのいう作家版）の最終次の印刷となつたわけである。しかし、『水滸云』批判が終熄した現在、作家版はそれはそれなりの長所があるから、やがて再版（すなわち増刷）されるかもしれない。そのときは、『再版説明』はふたたび書きあらためられていることであろう。

活字印刷による、一般民衆を対象とした『水滸傳』にも、その印刷毎の變動がみられるところに、文革以後の一期間の政治的變動をうかがうことができよう。

なお第一〇次印刷本があることについては狭間直樹氏に、第一次印刷本があることは礪波護氏に教示をうけて、はじめて知った。兩氏に感謝する。

(35) 前出の古典編集室論文については、注(27)参照。

(36) 注(35)参照。

(37) 江蘇省寫作會議大批判組「四人組」の篡黨奪權の反革命の黒い「將棋」の一手『光明日報』七七年三月二十四日。論文表題の原

文は、「四人幫」篡黨奪權の一步反革命黒「棋」。

(38) 同上。注(37)参照。

(39) 引用は北京第二棉紡廠労働者理論組の論文より。注(11)参照。

(40) 毛澤東は一九七五年九月二十一日、イギリスの元首相ヒースと會見したが、そのさいに同席したのは鄧小平副總理ひとり（ほかに通譯）だけであった。

ヒースは歸國後、『サンデー・タイムス』十月十二日號に、中國および日本を含む極東歴訪旅行の印象をのべ、毛澤東の後繼者として鄧小平が選ばれる可能性が強いことを示唆した。（『朝日新聞』十月十三日）。ヒースがこのような印象をうけたのは、鄧小平その人の態度ばかりでなく毛澤東の演出から影響をうけたことによるのであろう。

また、同年十二月二日、フォード・アメリカ大統領と會談したさい、中國の次期指導者が鄧小平副總理であることをうちあけた、といわれる。（ワシントン二十四日時事『朝日新聞』十二月二十五日）。

(41) この毛澤東のことばは、一九七六年四月十日の人民日報社説「偉大な勝利」（『光明日報』も同時掲載）に、はじめてゴシック體で引用された。

その引用にさいして、社説はまずつぎのようにのべている。

《毛主席は遠大なみとおしをもち、鄧小平のまきかえし（翻案）活動を洞察し、去年（一九七五年）十月から一系列の重要な指示をおこない、全黨全軍全國人民を指導して右翼まきかえし風に反撃する偉大な闘争を展開した。毛主席は指摘した……》

右の人民日報社説のまえおきからすれば、このことばは一九七五年十月に、毛澤東が語ったものであろう。そのころ、鄧小平は、「全黨各項工作の總綱定稿」を作成しおわっている（十月七日におわったといわれる）。

(42) この毛澤東のことば、人民日報社説で前注(41)のことばにすぐつづ

けて引用されている。したがって、ほぼ同じころ（あるいは同日）語ったものであるが、社説は、くぎって引用している。またこの毛澤東のことは引用する「永遠にまきかえしをやりません」（原文「永不翻案」）は、鄧小平のことはにまらがないとおもわれるが、かれが口頭でのべたのか、あるいは自己批判書に記したのかはわからない。この鄧小平のことは、これが初出ではなく、人民日報社説「まきかえしは人心をええない」「人民日報」七十六年三月十日『光明日報』も同時掲載）のなかで引用されている。

《かれは口さきでは「永遠にまきかえしをやりません」とかいながら、ひとたびあらためて工作をはじめると、持病がたまをもたげ、またもや資本主義の道をひきつづいて歩きだした。こういう人間はかつていちどもマルクス主義者であったことはなく、毛主席がかつて指摘した、いまだに思想が民主革命段階にとどまっているブルジョア民主派である。まさに『水滸』のなかの宋江が、農民蜂起の隊列のなかにありながら地主階級を代表しているのと同様であって、走資派は名は「共產黨員」であっても、実際には黨内外の新舊ブルジョア階級を代表している。》

(43) ここに引用した人民日報社説の表題原文は、「翻案不得人心」。この毛澤東のことは、人民日報社説「まきかえしは人心をええない」に、「偉大な領袖毛主席は最近指摘した。」としてゴシックで引用されている。この社説は前注(42)にもあるように、七十六年三月十日に掲載された『光明日報』も同時掲載。

(44) この毛澤東のことは、前注(43)と同じ社説のなかで、『毛主席は最近指摘した。』として引用された。

(45) 毛澤東が江青夫人らに、「四人組をつくるな」と警告したことばは、一九七六年十一月二十八日の人民日報社説「徹底的に“四人組”を暴露し批判せよ」（『光明日報』も同時掲載）で、はじめて引用された。

また、映画『創業』についての「批示」は、任平「輝やかしい歴史

的文件」『人民日報』十一月五日がはじめて全文を引用した。人民日報社説の表題原文は、「徹底揭發批判“四人幫”」。任平論文の表題原文は、「光輝的歴史文件」。

(46) 張春橋の「一九七六年二月三日に感あり」の全文を紹介し、批判をくわえたものとしては、魏華 湯嘯「陰謀篡奪權の鐵證——張春橋の“一九七六年二月三日に感あり”を評す」『人民日報』一九七六年十二月十三日。

(47) 江蘇省論文による。注(37)参照。

(48) 四 毛澤東と『水滸傳』

『毛澤東選集』第一卷、人民出版社、一九五一年十月、二〇二ページ。論文表題の原文は、「中國革命戰爭的戰略問題」。

(49) 同上、第二卷、人民出版社、一九五二年三月、七七九ページ。論文表題の原文は、「矛盾論」。

(50) 同上、第四卷、人民出版社、一九六〇年九月、一四七ページ。論文表題の原文は、「論人民民主專政」。

(51) 同上、第二卷、前出、五九五ページ。論文表題の原文は、「中國革命和中國共產黨」。

(52) 馮雪峯のこの論文、「『水滸』にかんするいくつかの問題に答えて」は、『文藝報』一九五四年、三、五、六、九、十一期に連載された。拙譯は『水滸』について」と題し、拙編譯『古典文學の評價』未來社、一九五六年四月、に収めてある。本文で馮雪峯の見解として紹介したのは、この拙譯書の四七・四八・五〇ページにのべられているものを整理してかかげた。すなわち、馮雪峯論文では「六、古い傳統的な見方、および前半と後半のどちらが重要かという問題」の末尾、「七、宋江の性格の描寫と歸順の問題」の末尾、「八、作者の見地について」の冒頭に近い箇所、にのべられている。馮雪峯の評論文は、ひとくぎりの文の長さがかなり長く、かつ、議論としてとりあげる概念が、いくつもの文に分散しているので、原文のまま引用すると、かなり紙面をついやさなければならぬ。それで要約

して紹介した。

馮雪峯はまた、《宋江の失敗や「悲劇的」な結末は、かれの「動搖」の結果と考えるより、主として現實條件の推移によって決定されたものと考えた方が、より歴史的現實を説明できるであろう。》  
ものべている。

馮雪峯論文の原題は「回答『水滸』の幾個問題」。

(53)

同上、拙譯書、四六ページ。本文のつぎの引用も、これにすぐつづくもので、四六～四七ページ。さらに本文のそのつぎの引用もすぐつづくもので、四七ページ。

(54)

『文藝報』批判、丁玲批判については、前出『現代中國の文學展開と論理』前注(3)参照。

(一九七九・五・二九稿了)